



Title	平成二十九年度 退職教員略歴・主要業績
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2018, 58, p. 223-277
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成二十九年 退職教員略歴・主要業績

おくだいら 奥平	しゅんろく 俊六	教授	芸術史講座（美術史学）
かたやま 片山	つよし 剛	教授	世界史講座（東洋史学）
すぎはら 杉原	とおる 達	教授	日本学講座（日本学）
たかはし 高橋	ぶんじ 文治	教授	国文学・東洋文学講座 （中国文学）
はまうず 浜渦	しんじ 辰二	教授	哲学講座（臨床哲学）

奥平俊六教授 略歴・研究業績一覧

■略歴

昭和28年3月 愛媛県松山市に生まれる
 昭和46年3月 愛光高等学校卒業
 同年4月 東京大学教養学部文科3類入学
 昭和49年4月 東京大学文学部美術史学科進学
 昭和52年3月 東京大学文学部美術史学科卒業
 同年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程美術史学進学
 昭和55年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程美術史学修了
 同年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程美術史学進学
 昭和58年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程美術史学単位取得退学
 同年4月 大阪府立大学総合科学部日本文化講座専任講師
 平成3年10月 大阪大学文学部美学科美術史第一講座助教授
 平成9年4月 大阪大学大学院文学研究科教授
 （この間、大阪大学総合学術博物館兼任、大阪大学CSCD兼任など）

〈集中講義・特別講義〉

弘前大学・東北大学・千葉大学・東京大学・武蔵野美術大学・名古屋大学・福井大学・神戸女学院大学・岡山大学・鳴門教育大学・チューリッヒ大学など

〈社会活動〉

京都国立博物館調査員・同客員研究員・大和文華館評議員・国際日本文化研究センター共同研究員・山口県立美術館収集審査委員・豊中市文化財保護審議会委員・丹波市文化財保護審議会委員・丹波市立植野記念美術館運営委員・京都市文化財観光資源財団専門委員・美術史学会常任委員・谷口財団国際シンポジウム事務局など

〈受賞〉

國華賞（第2回、平成2年）

■研究業績

I 著書

1. 『洛中洛外図と南蛮屏風』（新編名宝日本の美術25）小学館、平成3年12月、（単著）
2. 『光琳と上方琳派』（琳派美術館2）集英社、平成5年7月、（編共著）
3. 『彦根屏風—無言劇の演出』（絵は語る10）平凡社、平成8年3月、（単著）
4. 『俵屋宗達』（新潮日本美術文庫）新潮社、平成9年6月、（単著）
5. 『日本美術館』小学館、平成9年10月、（共編著）
6. 『舟木本・洛中洛外図一町のにぎわいが聞こえる』（小学館アートセレクション）小学館、平成13年3月、（単著）
7. 『すぐわかる人物・ことば別 桃山時代の美術』（東京美術）、平成21年7月、（編共著）
8. 『デジタル洛中洛外図 島根県美本』淡交社、平成21年11月、（編共著）
9. 『懷徳堂ゆかりの絵画』大阪大学出版会、平成24年3月、（編共著）
10. 『屏風をひらくとき』大阪大学出版会、平成26年3月、（単著）
11. 『年譜でたどる琳派400年』淡交社、平成27年1月、（共編著）
12. 『京都 実相院門跡』思文閣出版、平成28年2月、（共編著）
13. 『畫下遊樂（一）奥平俊六美術史論集』藝華書院、平成30年3月刊行予定、（単著）

II 論文

1. 「文使い図攷—プリンストン大学付属美術館所蔵『文使い図』を中心に」『改訂版原色日本の美術27 在外美術』小学館、昭和55年10月、113-144頁
2. 「彦根屏風について—〈鏡像関係〉と〈画中画〉の問題を中心に—」『美術史』109号、昭和55年11月、12-25頁
3. 「初期歌舞伎図」『國華』1051号、昭和57年5月、135-143頁
4. 「『彦根屏風』—屏風劇の演出」『近世風俗図譜6 遊里』小学館、昭和57年10月、135-143頁
5. 「うしろ姿の〈かぶき者〉」『近世風俗図譜10 歌舞伎』小学館、昭和58年5月、113-121頁
6. 「絵の中の絵」『月刊百科』259号、昭和59年5月、113-121頁
7. 「存允白筆『四暢図』」『学叢』8号、昭和61年3月、77-92頁

8. 「金地と黒白—近世絵画の背地表現」『近世日本の絵画』京都国立博物館編、昭和61年6月、191-215頁
9. 「遊楽図二題—『清水寺遊楽図』・『春秋遊楽図』」『古美術』81号、昭和62年1月、98-101頁
10. 「狩野山雪筆『洛外図』について」『國華』1101号、昭和62年3月、9-31頁
11. 「狩野探幽筆『春日若宮御祭図屏風』」『國華』1111号、昭和63年2月、29-39頁
12. 「四条河原納涼図」『古美術』91号、平成1年7月、71-81頁
13. 「『山楽山雪山水帖』について」『大和文華』82号、平成1年9月、38-56頁
14. 「縁先の美人—寛文美人図の一姿型をめぐる—」『日本絵画史の研究』吉川弘文館、平成1年10月、647-690頁
15. 「加藤文麗と野々村信武」『古美術』93号、平成2年1月、68-75頁
16. 「燕村の金屏・銀屏」『古美術』95号、平成2年7月、69-79頁
17. 「風流踊を描く絵画」『秘蔵日本美術大観1 大英博物館』講談社、平成4年5月、258-263頁
18. 「宗達の引用源—水墨画を中心に—」『琳派美術館1 宗達と琳派の源流』集英社、平成4年12月、110-121頁
19. 「日本の絵画と中国の絵画」『異文化の交流—過去・現在・未来』大阪大学、平成5年9月、13-30頁
20. 「美人画と肖像画」『京の美人画展』京都文化博物館、平成5年9月、5-9頁
21. 「金閣寺の遊楽」『日本美術工芸』664号、平成6年1月、20-29頁
22. 「風俗画における群像表現—主題としての群衆」『人の〈かたち〉人の〈からだ〉』平凡社、平成6年4月、160-174頁
23. 「河内越の女、その後」『伊勢物語の世界』五島美術館、平成6年10月、182-189頁
24. 「美人と犬」『待兼山論叢』28号、平成6年12月、1-22頁
25. 「屏風をひらくとき」『サントリー美術館名品展』姫路市立美術館、平成7年11月、77-84頁
26. 「日本の絵画と中国の絵画」『異文化の交流』大阪大学出版会、平成8年11月、改稿再録
27. 「屏風について」『近世屏風絵展』篠山歴史美術館、平成9年10月
28. 「金閣寺の遊楽」『寛永文化のネットワーク—「隔蓑記」の世界』思文閣出版、平成10年3月、改稿再録
29. 「寛永文化のかたち—絵画史の立場から」『寛永文化のネットワーク—「隔蓑記」の世界』思文閣出版、平成10年3月、271-277頁

30. 「彦根屏風とともに」『彦根屏風への誘い』彦根城博物館、平成10年10月、92-97頁
31. 「目の愉楽」『古今』1号、平成10年10月、118-122頁
32. 「狩野派の役割」『仏教と文化』33号、平成11年2月、四天王寺、91-115頁
33. 「酔うこと」『古今』2号、平成11年4月、103-109頁
34. 「大学における美術史教育の現状と課題」『東洋美術研究における大学と博物館』谷口財団第14回国際シンポジウム報告書、平成12年2月、69-74頁
35. 「都市の実感」『古今』4号、平成12年2月、120-128頁
36. 「寛永時代の雪舟気分」『雲谷等益展』山口県立美術館、平成13年12月
37. 「都市の自画像」『適塾』35、平成14年6月、16-21頁
38. 「洛中洛外図の魅力—主題の生命」『洛中洛外図 暮らし』米沢市上杉博物館、平成15年9月、50-54頁
39. 「遍在する異文化」『一冊の本』朝日新聞社、平成16年5月、52-54頁
40. 「こう見えるからこう描く—自閉症の人の認知と表現—」『コミュニティ・アート・シンポジウム』（「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」コミュニティ・アート部門）、平成17年3月、26-34頁
41. 「二人の山雪—荒磯のテラスと桃源郷」『松本山雪—桃山と江戸のはざまに』展図録、愛媛県立美術館、平成19年2月、4-7頁
42. 「大庄屋三木家の絵画」『懷徳堂センター報2006』、大阪大学懷徳堂センター、平成19年3月、3-13頁（共著）
43. 「桃山風俗画の誕生と展開」『別冊太陽』145号、平凡社、平成19年3月、76-83頁
44. 『カブキモノと初期歌舞伎の図像研究』科研報告書、平成20年3月、全91頁
45. 「コミュニティ・アート美術部門の活動—アウトサイダー・アートをめぐって—」『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究 報告書』（日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業研究領域V-3文学・芸術の社会的媒介機能）、平成21年3月、292-299頁
46. 「自閉症の人はなぜ電車が好きなのか—絵画作品をてがかりに—」『芸術と福祉—アーティストとしての人間—』（大阪大学出版会）、平成21年6月、263-286頁
47. 「山雪の受難、そして「雪汀水禽図」の画想」『狩野山楽・山雪展』図録、京都国立博物館、平成25年3月、234-245頁
48. 「カブキモノと阿国歌舞伎の図像」『出雲阿国展』島根県立美術館、平成25年9月、6-18頁
49. 「江阿弥と若冲」『大和文華』127号、平成27年1月、1-11頁

50. "Fans of the Zen Community: A Study of the Nanzen-ji Screens", Ink and Gold - Art of Kano, Philadelphia Museum of Art, 2015.3, pp. 12-21
51. 「宗達の目の記憶、あるいは音符としての形」『琳派一京を彩る』京都国立博物館、平成27年10月、216-223頁
52. "Sôtatsu's Gold-and-Silver Paintings :The interaction Between Painting and Calligraphy" , Sôtatsu: Making Waves" ,The Freer Gallery of Art ,2015.10,pp. 42-63

Ⅲ 書評・作品解説・教科書ほか

1. 『日本屏風絵集成 6 花鳥画—花木花鳥』(講談社、昭和53年9月) 作品解説
2. 『日本絵画百選』(日本経済新聞社、昭和54年10月) 作品解説
3. 『日本屏風絵集成 1 屏風絵の成立と展開』(講談社、昭和56年6月) 資料紹介
4. 『國華索引』(國華社、昭和56年11月、共著)
5. 「草花表現の系譜 松」(『いけばな美術全集10 美術と草花』集英社、昭和57年11月)
6. 『日本史写真資料』(山川出版社、昭和58年4月) 作品解説
7. 「彦根屏風」(『みずゑ』931号、昭和59年6月、改稿再録)
8. 『米国心遠館コレクション近世日本絵画集成』(京都書院、昭和59年10月) 作品解説
9. 『世界大百科事典』(平凡社、昭和59年11月) 項目
10. 「新刊紹介」(『日本美術工芸』554～592号連載、昭和59年11月～昭和63年1月)
11. 『原色日本の意匠 8 人』(京都書院、昭和60年3月) 作品解説
12. 『原色日本の意匠 9 藤・柳・春夏草』(京都書院、昭和60年5月) 作品解説
13. 『原色日本の意匠10 獣・魚・貝』(京都書院、昭和60年7月) 作品解説
14. 『原色日本の意匠11 菊・紅葉』(京都書院、昭和60年10月) 作品解説
15. 『原色日本の意匠13 吉兆』(京都書院、昭和61年6月) 作品解説
16. 「絵の中の絵」(『絵画の発見—〈かたち〉を読み解く19章』平凡社、昭和61年6月、改稿再録)
17. 「辻惟雄著『日本美術の表情』」(『みずゑ』939号、昭和61年8月) 書評
18. 『狩野山雪—仙境への誘い』(大和文華館、昭和61年10月、共著) 作品解説・資料編
19. 「ハコの話」(『キュレーター』1号、昭和61年11月) その他
20. 「1986年の歴史学会—回顧と展望(近世・10美術)」(『史学雑誌』第96編5号、昭和62年5月) その他
21. 「京の眺望(洛中洛外高見の見物)」(『太陽』307号、昭和62年5月)

22. 『日本美術史事典』(平凡社、昭和62年6月、改稿再録)項目
23. 『日本絵画史図典』(福武書店、昭和62年11月、共著)概論・項目
24. 『萬野コレクション撰集』(萬野記念文化財団、昭和63年5月)作品解説
25. 『琳派』(萬野美術館、昭和63年9月、単著)展覧会図録
26. Painting, Literature and the Theatrical Arts in Edo Genre Painting: Images of the
“Beauty on the Veranda” International Conference on Japanese Art History: The
State of the Field. (University of California at Berkeley、平成1年2月)学会発表要旨
27. 『室町時代の屏風絵展』(東京国立博物館、平成1年3月)作品解説
28. 『肉筆浮世絵』(萬野美術館、平成1年3月)展覧会リーフレット
29. 『日本美を語る9 絢爛の装飾美』(ぎょうせい、平成1年3月)作品解説
30. 「如庵附属書院障壁画調査報告」(『大和文華』82号、平成1年9月、共著)報告書
31. 『日本美術全集18 宗達と光琳』(講談社、平成2年12月)作品解説
32. 『カラー版日本美術史』(美術出版社、平成3年9月、共著)教科書
33. 「なぜ肉体を描かないのか」(『人体表現—その歴史と現在 シンポジウム報告書』静岡県
立美術館、平成4年3月)
34. 『秘蔵日本美術大観 1 大英博物館』(講談社、平成4年5月)作品解説
35. 『日本美術全集17 狩野派と風俗画』(講談社、平成4年6月)作品解説
36. 「ハリー・パッカード『日本美術蒐集記』」(『美術手帖』671号、平成5年6月)書評
37. 『日本美術全集13 雪舟とやまと絵屏風』(講談社、平成5年10月)作品解説
38. 『琳派美術館 4 工芸と琳派感覚の展開』(集英社、平成5年11月)作品解説
39. 『世界の中の日本美術』(美術年鑑社、平成6年5月)作品解説
40. 「美術へのまなざし—日本と西洋—」(『第18回美術講演会講演録』鹿島美術財団、平成
7年3月、共著)
41. 『西尾市悉皆調査報告—社寺文化財(彫刻・絵画)報告書』(西尾市教育委員会、平成7
年7月)作品解説
42. 『肉筆浮世絵大観 7 萬野美術館』(講談社、平成8年1月)改稿論文・作品解説
43. 「鹿とまどろむ—源琦筆『寿老人図』」(『広報とよなか』552号、平成8年5月)
44. 「見得をきる鶏—西福寺の若冲」(『広報とよなか』554号、平成8年7月)
45. 「戸田禎佑著『日本美術の見方』」(『紫明』1号、平成9年10月)書評
46. 「辻惟雄著『奇想の系譜 又兵衛—国芳』」(『紫明』2号、平成10年3月)書評
47. 「名児耶明著『美術館へ行こう 書に心をよせる』」(『紫明』3号、平成10年9月)書評
48. 「星野鈴著『円山応挙』」(『紫明』4号、平成11年3月)書評

49. 「寺村千代子『風の散歩 小さな芸術家たち』」(『紫明』 5号、平成11年10月) 書評
50. 「種村季弘著『贋作者列伝』」(『紫明』 6号、平成12年3月) 書評
51. 「本多平八郎姿絵」(『二枚の絵』毎日新聞社、平成12年年5月) 作品解説
52. 「彦根屏風」(『名画日本史』 1巻、朝日新聞社、平成12年10月) 作品解説
53. 「狩野博幸著『伊藤若冲の動植綵絵』」(『紫明』 7号、平成12年10月) 書評
54. 『日本思想史辞典』(「画論」「小堀遠州」「作庭記」「等伯画説」「狩野派」「絵巻」「雪舟」、
べりかん社、平成13年6月) 辞典項目
55. Screens in and around the Capital, Cherry Blossom Viewing, *Turning Point Oribe
and the Arts of Sixteenth-Century Japan*, The Metropolitan Museum of Art,
NewYork, pp. 225-227, 234-241, 260-267, 平成13年10月
56. 『日本のデザイン』(紫紅社、平成13年11月) 作品解説
57. 「赤瀬川源平・山下裕二著『京都、オトナの修学旅行』」(『紫明』 9号、平成13年10月)
書評
58. 「綿田稔著『雲谷等益一寛永期の雪舟流』」(『紫明』 10号、平成14年3月) 書評
58. 「ミヤコの路地裏——洛中洛外図の構想と細部表現——」(『シティキャンパス講座』
佛教大学四条センター、平成14年6月)その他
59. 「小林忠著『江戸浮世絵を読む』」(『紫明』 11号、平成14年10月) 書評
60. 「日高薫著『日本美術の言葉案内』」(『紫明』 12号、平成15年3月) 書評
61. 『日本史文献辞典』(「彦根屏風」、弘文社、平成15年12月) 辞典項目
62. 「宮崎法子著『花鳥山水画を読み解く—中国絵画の意味—』」(『紫明』 13号、平成15年10
月) 書評
63. 『エンカルタ2004』(「洛中洛外図」、マイクロソフト社、平成15年11月) 辞典項目
64. 「香月婦美子著『香月泰男 一瞬一生の画業』」(『紫明』 14号、平成16年3月) 書評
65. 「戸田和孝著『まちなみまんがな草子』」(『紫明』 15号、平成16年10月) 書評
66. 「森鷗外と美術展実行委員会編『森鷗外と美術』」(『紫明』 19号、平成18年9月) 書評
67. 「光琳の生きた環境と時代」(『市報あまがさき』 1484号、平成19年1月) 書評
68. 「はたよしこ著『DNAパラダイス—二七人のアウトサイダー・アーティストたち—』」
(『紫明』 20号、平成19年3月) 書評
69. 「鶏図 伊藤若冲筆」(『新修茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸』茨木市史編さん委
員会、平成20年3月) 作品解説
70. 「岡谷公二著『郵便配達夫シュヴァルの理想宮』」(『紫明』 21号、平成19年9月) 書評
71. 「隆慶一郎著『吉原御免状』」(『紫明』 22号、平成20年3月) 書評

72. 「辻惟雄著『岩佐又兵衛—浮世絵をつくった男の謎』(『紫明』23号、平成20年9月) 書評
73. 「狂斎のいた近代」(『京都国立博物館だより』160号、京都国立博物館、平成20年10月) 展覧会評
79. 「懷徳堂ゆかりの絵画」(『記念会だより』82号、懷徳堂記念会、平成21年2月) その他
80. 「日高薫著『異国の表象—近世輸出漆器の想像力』」(『紫明』24号、平成21年3月)
81. 「大石学編『高家前田家の総合的研究—近世官僚制とアーカイブズ—』」(『紫明』25号、平成21年9月) 書評
82. 「宮田珠己著『晴れた日は巨大仏を見に』」(『紫明』26号、平成22年3月) 書評
83. 「水木しげる著『水木サン幸福生活論』」(『紫明』27号、平成22年10月) 書評
84. 「五十嵐公一著『近世画壇のネットワーク—注文主と絵師—』」(『紫明』28号、平成23年3月) 書評
85. 「馬淵美帆著『絵を用い、絵を創る—日本絵画における先行図様の利用—』」(『紫明』29号、平成23年10月、) 書評
86. 「額縁をくぐって物語の中へ 彦根屏風」(NHK、BSプレミアム、平成24年3月8日放送) 番組監修
87. 「超時空トラベル 京都に恋 洛中洛外図」(NHK、BSプレミアム、平成24年3月29日放送) 番組監修
88. 「中村健之助・中村悦子著『ニコライ堂の女性たち』教文館」(『紫明』30号、平成24年3月) 書評
89. 「今週の本棚・この3冊：風俗画」毎日新聞平成24年9月9日
90. 「峰岸純夫・江田郁夫編『足利尊氏再発見—一族をめぐる肖像・仏像・古文書—』」(『紫明』31号、平成24年10月、98頁) 書評
91. 「超時空トラベル・秋 京都に恋 洛中洛外図」(NHK、BSプレミアム、平成24年11月15日放送) 番組監修
92. 「遺すこと、伝えること」『懷徳堂だより』平成25年2月号、2013.2
93. 「参考文献」『狩野山楽・山雪展』図録(山下善也と共編)、京都国立博物館、平成25年3月、356-357頁
94. 「五十嵐公一著『京狩野三代生き残りの物語—山楽・山雪・永納と九条幸家—』」(『紫明』32号、平成25年3月) 書評
95. 「泉武夫『竹を吹く人々—描かれた尺八奏者の歴史と系譜—』」(『紫明』33号、平成25年10月、100頁) 書評
96. 「洛中洛外図の歩き方」『サライ』平成25年10月号、72-83頁、監修

97. 「綿田稔『漢画師 雪舟の仕事』」(『紫明』34号、平成26年3月) 書評
98. 「シンポジウムレポート」京都文化芸術振興プラン実行委員会編『文化庁平成25年度地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業 伊藤若冲作品を活用した地域振興事業報告書』平成26年3月、73-75頁
99. 「古田亮『特講 漱石の美術世界』」(『紫明』35号、平成26年8月) 書評
100. 「JAWSのこと」『鹿島美術財団30年史』公益財団法人鹿島美術財団、平成26年10月、58頁
101. 「桃山時代」『日本美術史入門』別冊太陽、平成26年10月、pp. 189-222
102. 「若冲、金地と向きあう」『別冊太陽 若冲百図』平成27年2月、pp. 152-153
103. 「美術と絵画資料の展覧会企画と運営 [Bプログラム] 日本美術関連」『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成教育—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭Ⅰ、Ⅱ—2013-2014年度報告書』大阪大学大学院文学研究科、平成27年3月、pp. 69-75
104. 『公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画』渡辺美術館、平成27年3月、全32頁、門脇むつみ・森道彦共編
105. “Kano School, Assembled Fan Paintings” Ink and Gold - Art of Kano, Philadelphia Museum of Art, 平成27年3月, p. 248 作品解説
106. 「門脇むつみ『巨匠 狩野探幽の誕生』」(『紫明』36号、平成27年3月) 書評
107. Sōtatsu: Making Waves”, The Freer Gallery of Art作品解説「鹿下絵和歌巻」シアトル pp. 223-225、「新古今屏風」 pp. 230-231、「誰ヶ袖屏風」 pp. 240-241、「樹木図屏風」 pp. 284-285、「鶏頭玉葱図屏風」 pp. 292-295、「鳥窠和尚図」クリーブランド pp. 260、2015.10
108. 「風神雷神図の画家：俵屋宗達の正体」(NHK、BSプレミアム、平成27年10月31日放送)、美術史監修
109. 「辻邦生『嵯峨野明月記』」(『紫明』37号、平成27年10月) 書評
110. 「黒田日出男『洛中洛外図・舟木本』」(『紫明』38号、平成28年3月) 書評
111. 『公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画Ⅱ』渡辺美術館、平成28年3月、全42頁、門脇むつみ・森道彦共編
112. 「劇中絵巻物『懷海聖人絵伝』 詞書の古語訳」『虻蛄 疫病神シリーズ』BSスカパー、平成28年2月4日放映
113. 「風神雷神図 万人が宗達作と認める理由」『朝日ビジュアルシリーズ 週間日本の名寺をゆく 仏教新発見(改訂版) 19』(朝日新聞出版、pp. 12-13) 平成28年5月

- 114.「佐藤晃子『画題で読み解く 日本の絵画』」(『紫明』39号、p90、平成28年9月)書評
- 115.「学界消息 中部義隆氏の訃」『日本歴史』821号、p123、平成28年10月
- 116.「乱世が生んだ桃山美術の巨匠たち 又兵衛と同じ数奇な運命を生きた武家出身の画家」
『岩佐又兵衛 浮世絵の開祖が描いた奇想』(平凡社、別冊太陽247、pp42-43)平成29年2月
- 117.「佐藤康宏『湯女図 視線のドラマ』」(『紫明』40号、p82、平成29年3月)書評
- 118.『公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告 狩野派Ⅲ』渡辺美術館、平成29年3月、全42頁、門脇むつみ・森道彦共編
- 119.「久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』」(『紫明』41号、p88、平成29年9月)書評

片山 剛教授 略歴

略歴

- 1952年 8月17日 山梨県甲府市に生まれる
- 1968年 4月～1971年 3月 東京都立国立高等学校 入学／卒業
- 1972年 4月～1977年 3月 東京外国語大学外国語学部中国語学科 入学／卒業
- 1977年 4月～1980年 3月 東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専門課程（修士課程）
入学／修了 文学修士
- 1980年 4月～1981年 9月 東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専門課程（博士課程）
進学／中途退学
- 1981年10月～1984年 3月 高知大学人文学部 講師
- 1984年 4月～1989年 3月 高知大学人文学部 助教授
- 1986年10月～1987年 7月 文部省在外研究員（若手枠）として中国・香港に出張
- 1989年 4月～1996年 3月 大阪大学文学部 助教授
- 1996年 4月～1999年 3月 大阪大学文学部 教授
- 1999年 4月～2018年 3月 大阪大学大学院文学研究科 教授
- 2001年 3月～2002年 1月 文部科学省在外研究員として香港・イギリス・アメリカに出張
- 2006年 4月～2010年 3月 大阪大学文学研究科 副研究科長
- 2008年 4月～2010年 3月 大阪大学 教育研究評議員
- 2010年 4月～2012年 3月 大阪大学 文学研究科長・文学部長

学界等の主な役員・委員

- 2001年10月～2012年 3月 （財団法人）史学会 評議員
- 2012年 4月～現在に至る （公益財団法人）史学会 評議員
- 2014年 6月20・21日 上海交通大学 歴史系「中長期発展」総合評価 国際評価委員
- 2015年 4月～2017年 3月 （公益財団法人）大学基準協会 大学評価委員会委員
- 2015年 9月15日 香港中文大学 歴史系課程博士論文口頭試問 学外審査員

主要業績目録（年次順）

A 学術書

- 1 『華中・南デルタ農村実地調査報告書』（濱島敦俊・高橋正と共著）
『大阪大学文学部紀要』第34巻 576p. 1994年3月（第二部珠江デルタ pp. 305-506を執筆）
- 2 編著『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会 446p. 2017年2月
- 3 単著『清代珠江デルタ図甲制の研究』大阪大学出版会 2018年秋刊行予定

B 学術論文（いずれも単著）

- 1 清末広東省珠江デルタの図甲表とそれをめぐる諸問題：税糧・戸籍・同族
『史学雑誌』第91編第4号 pp. 42-81 1982年4月
- 2 清代広東省珠江デルタの図甲制について：税糧・戸籍・同族
『東洋学報』第63巻第3・4合併号 pp. 1-34 1982年3月
中国語訳は、柳憲 訳「清代広東省珠江三角洲的図甲制：税糧・戸籍・同族」劉俊文主編『日本中青年学者論中国史（宋元明清卷）』上海：上海古籍出版社 pp. 539-571 1995年12月
- 3 清末広東省珠江デルタにおける図甲制の諸矛盾とその改革（南海県）：税糧・戸籍・同族
『海南史学』第21号 pp. 1-25. 1983年8月
中国語訳は、金世龍 訳「清末広東省珠江三角洲地区図甲制的矛盾及其改革（南海県）：税糧・戸籍・宗族」明清広東省社会経済研究会 編『明清広東社会経済研究』広州：広東人民出版社 pp. 341-369 1987年6月
- 4 清末広東省珠江デルタにおける図甲制の諸矛盾とその改革（順徳県・香山県）：税糧・戸籍・同族
『中国近代史研究』第4集 pp. 1-19 1984年12月
- 5 『許舒博士所輯 廣東宗族契據彙録（上・下）』を読んで：清末民国期の立戸・税契・過割
『センター通信』（東京大学東洋文化研究所 東洋学文献センター）第31号 pp. 4-15 1991年3月
- 6 清末珠江三角洲地区図甲表与宗族組織的改組（中国語）
葉顕恩 主編『清代区域社会経済研究（上）』北京：中華書局 pp. 498-509 1992年8月
- 7 清代乾隆時期的科举応募資格、戸籍、宗族：以広東省為主（中国語）

- (香港) 珠海書院中国文史研究所 編『羅香林教授紀念論文集 (上)』台北：新文豐出版公司 pp. 529-552 1992年12月
- 8 珠江デルタ桑園囲の構造と治水組織：清代乾隆年間～民国期
『東洋文化研究所紀要』（東京大学）第121冊 pp. 137-209 1993年 3 月
 - 9 珠江デルタの集落と「村」：清末の南海県と順徳県
『待兼山論叢』（史学篇）第28号 pp. 1-30 1994年12月
 - 10 清末・民国期、珠江デルタ順徳県の集落と「村」の領域：旧中国村落の再検討へ向けて
『東洋文化』第76号 pp. 163-199 1996年 1 月
 - 11 華南地方社会と宗族：清代珠江デルタの地縁社会・血縁社会・図甲制
森正夫・野口鐵郎・濱島敦俊・岸本美緒・佐竹靖彦 編『明清時代史の基本問題』汲古書院 pp. 471-500 1997年10月
中国語訳は、欒成顕 訳「華南地方社会与宗族：清代珠江三角洲的地縁社会、血縁社会、図甲制」周紹泉・欒成顕 等訳『明清時代史的基本問題』北京：商務印書館 pp. 422-449 2013年 8 月
 - 12 清代中期の広府人社会と客家人の移住：童試受験問題をめぐって
山本英史 編『伝統中国の地域像』慶應義塾大学出版会 pp. 167-210 2000年 1 月
 - 13 珠江デルタの市場と市鎮社会：19世紀初頭順徳県龍山堡の大岡墟
森時彦 編『中国近代の都市と農村』京都大学人文科学研究所 pp. 195-222 2001年 3 月
 - 14 清代民間社会と中央及地方政府：以広東省為主（中国語）
葉顯恩・卞恩才 主編『中国伝統社会經濟与現代化：從不同的角度探索中国伝統社会的底蘊及其与現代化的關係』広州：広東人民出版社 pp. 485-495 2001年 9 月
 - 15 死者祭祀空間の地域的構造：華南珠江デルタの過去と現在
江川温・中村生雄 編『死の文化誌：心性・習俗・社会』昭和堂 pp. 108-142 2002年 10月
 - 16 清代珠江デルタの里甲経営と地域社会：順徳県龍江堡
『待兼山論叢』（史学篇）第36号 pp. 1-26 2002年12月
 - 17 “広東人” 誕生・成立史の謎をめぐって：言説と史実のはざまから
『大阪大学大学院文学研究科紀要』第44巻 pp. 1-32 2004年 3 月
 - 18 明代珠江デルタの宗族・族譜・戸籍：一宗族をめぐる言説と史実
井上徹・遠藤隆俊 編『宋－明宗族の研究』汲古書院 pp. 459-486 2005年 3 月
 - 19 中国史における明代珠江デルタ史の位置：“漢族” の登場とその歴史的刻印
『大阪大学大学院文学研究科紀要』第46巻 pp. 37-64 2006年 3 月

- 20 “広東人”誕生之謎：從伝説和史実之間來考察（朱海濱訳）
『歴史地理』（中国地理学会歴史地理專業委員会）第21輯 pp. 415-431 2006年5月
- 21 近世・近代 広東珠江デルタの由緒言説
『歴史学研究』第847号 pp. 23-31, 80 2008年11月
中国語訳は、蘇龍嘎 訳「有関近世広東珠江三角洲地区歴史由来的言説」《日本中国史研究年刊》刊行会 編『日本中国史研究年刊（2008年度）』上海：上海古籍出版社 pp. 280-298 2011年5月
- 22 自然の領有における階層構造：字（あざ）の世界と一筆耕地の世界
森時彦 編『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター pp. 315-341 2009年6月
中国語訳は2種類作られ、3種類の雑誌・書籍に掲載される。
布和 訳「擁有土地自然的重層構造：20世紀前期広東農村的单位地名及単宗農田の領域」劉傑 編『日本当代中国研究 2010』日本 人間文化研究機構（NIHU）当代中国地区研究基地聯合項目核心基地 早稲田大学現代中国研究所 pp. 60-81 2010年10月
袁広泉 訳「対自然的擁有形態の多重結構：“塋埗及涌源”与“単宗耕地”範疇及其相關權益帰属」森時彦 編 袁広泉 訳『二十世紀的中国社会』（上）（日本京都大学中国研究系列 二）北京：社会科学文献出版社 pp. 348-376 2011年12月
袁広泉 訳「対自然的擁有形態の多重結構：“塋埗及涌源”与“単宗耕地”範疇及其相關權益帰属」日本 人間文化研究機構現代中国区域研究項目 編『当代日本中国研究』（第一輯 歴史・社会）北京：社会科学文献出版社 pp. 200-225 2013年9月
- 23 近世・近代 広東珠江デルタの由緒言説（番号21の増訂版）
歴史学研究会 編『由緒の比較史』（シリーズ 歴史学の現在 第12巻）青木書店 pp. 97-123 2010年5月
- 24 珠江三角洲地区漢族齊民社会的誕生及其特質（中国語）
『第3届「族群、歴史与地域社会」學術研討会 專題演講一』台北：中央研究院台湾史研究所 21p. 2011年9月
- 25 20世紀前半、長江中洲の開発をめぐる社会史：南京江心洲の場合
森時彦 編『長江流域社会の歴史景觀』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター pp. 103-126 2013年10月

C 調査報告

- 1 珠江水系
『中国の経済調整下における農業動向』日中経済協会 pp. 179-191 1981年3月
- 2 『中国農村基礎統計資料集（上・下）』（小島麗逸・片山剛・原宗子・三好章 共編）
日中経済協会 1981年3月
- 3 3中全会以降の中国農業と人口政策
『中国の経済調整下における農業政策』日中経済協会 pp. 33-64 1982年4月
- 4 明清時代における中国農村社会の特質と王朝支配の性格
『三島海雲記念財団 第23回 事業報告書（昭和60年度）』（財団法人）三島海雲記念財団
pp. 189-192 1986年10月
- 5 『珠江デルタ開発史と地域社会の形成・展開』
（平成6・7年度科学研究費補助金 一般研究C 課題番号 06610342 研究成果報告書
研究代表者：片山剛）大阪大学文学部 15p. 1996年3月
- 6 珠江デルタから見る紅河デルタ村落の領域
末成道男 編『人類学からみたベトナム社会の基礎的研究：社会構造と社会変動の理論
的検討』（平成6・7年度科学研究費補助金 総合研究A 課題番号 06301041 研究成
果報告書 研究代表者：末成道男）pp. 55-60 1996年3月
- 7 片山剛 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第1号（平成17年度
科学研究費補助金 基盤研究A 課題番号 17251006 中間報告書 研究代表者：片山
剛）大阪大学文学研究科 88p. 2006年3月
- 8 片山剛 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第2号（平成18年度
科学研究費補助金 基盤研究A 課題番号 17251006 中間報告書 研究代表者：片山
剛）大阪大学文学研究科 214p. 2007年3月
- 9 片山剛 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第3号（平成19年度
科学研究費補助金 基盤研究A 課題番号 17251006 中間報告書 研究代表者：片山
剛）大阪大学文学研究科 100p. 2008年3月
- 10 片山剛 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第4号（平成20年度
科学研究費補助金 基盤研究A 課題番号 17251006 研究成果報告書 研究代表者：
片山剛）大阪大学文学研究科 184p. 2009年3月
- 11 片山剛 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第5号（平成25年度
科学研究費補助金 基盤研究A 課題番号 23242043 中間報告書 研究代表者：片山
剛）大阪大学文学研究科 130p. 2014年3月

- 12 片山剛・山本一 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニュースレター』第6号（平成26年度科学研究費補助金 基盤研究A 課題番号 23242043 研究成果報告書 研究代表者：片山剛）大阪大学文学研究科 144p. 2015年3月
- 13 片山剛・山本一 編著『近代東アジア土地調査事業研究 ニュースレター』第7号 大阪大学文学研究科 110p. 2016年3月

D 一般書・その他

- 1 須藤健一 編『フィールドワークを歩く：文科系研究者の知識と経験』嵯峨野書院 1996年6月（分担執筆箇所は、pp. 280-282, 297-304, 392-393）
- 2 崎村（義郎）さんと『萱野長友研究』
『大平山』（三里史談会 会誌）第22号 pp. 16-19 1996年11月
- 3 広東人社会と客家人：一八世紀の国家と移住民
塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子 編『流動する民族：中国南部の移住とエスニシティ』平凡社 pp. 41-62 2001年3月
- 4 『華中・南デルタ農村実地調査報告書』（大阪大学文学部紀要第34巻別冊）「第一部 江南デルタ」索引（濱島敦俊・片山剛・横山政子 共編）
『大阪大学大学院文学研究科紀要』第41巻 pp. 73-103（逆ページ）2001年3月
- 5 『華中・南デルタ農村実地調査報告書』（大阪大学文学部紀要第34巻）「第二部 珠江デルタ」索引（濱島敦俊・片山剛・横山政子 共編）
『大阪大学大学院文学研究科紀要』第43巻 pp. 49-71（逆ページ）2003年3月
- 6 Katayama Tsuyoshi, ed. *Course Records "History, Manners and Customs, and Interchange - Asia and Japan -" in the Osaka University Short-term Student Exchange Program (OUSSEP) 2006 Fall Semester* Toyonaka: Graduate School of Letters, Osaka University 90p. 2007
- 7 漢族と非漢族をめぐる史実と言説：広東省を中心に
大阪大学中国文化フォーラム 編『現代中国に関する13の問い：中国地域研究講義』（OUFCブックレット第1巻）大阪大学中国文化フォーラム pp. 3-25 2013年3月
- 8 歴史学の醍醐味をどう伝えるか
『史学雑誌』第122編第3号 pp. 35-37 2013年3月

E 講演・学会報告の記録・要旨

- 1 明清時代的王朝統治と民間社会：關於両者接点的戸之問題（中国語／陳志和記録整理）

『広州研究』1986年第6期 pp. 63-64 1986年

2 珠江デルタから考える中国の地域史

『東洋学報』第85巻第2号 pp. 137-138 2003年9月（平成15年度春期東洋学講座講演要旨）

3 二十世紀中国大陸における土地調査事業と農村社会

東華大学歴史学系・日本大阪大学中国文化論壇・南開大学歴史学院 編『「第二屆現代中国社会變動与東亜新格局」国際学術討論会 会議手冊&論文集』台湾東華大学 pp. 411-422 2008年8月

4 擁有土地自然的重層結構：単位村域的領域及単位農田の領域

大阪大学中国文化フォーラム・南開大学歴史学院・東華大学歴史学系 編『「第三屆現代中国社会變動与東亜新格局」国際学術討論会 会議手冊&論文集』大阪大学中国文化フォーラム pp. 119-127 2009年8月

F 学界動向・書評

1 （書評）ロイ・ホファーンズ Jr. 著『砕けた波：中国共産党の農民運動，1922-1928年』

『東洋学報』第60巻第1・2合併号 pp. 183-190 1978年11月

2 （書評）可児弘明 著『近代中国の苦力と「猪花」』

『アジア経済』第21巻第10号 pp. 113-116 1980年10月

3 （学界動向）明・清

『史学雑誌』（1983年の歴史学界：回顧と展望）第93編第5号 pp. 211-218 1984年5月

4 （論文評）寺田浩明「『崇明縣志』に見える「承價」「過投」「頂首」について：田面田底慣行形成過程の一研究」（東京大学東洋文化研究所紀要第98冊所収）

『法制史研究』第36号 pp. 359-363 1987年3月

G 事典項目

1 開拓史 ①珠江デルタ

京都大学東南アジア研究センター 編『事典 東南アジア：風土・生態・環境』弘文堂 pp. 408-409 1997年3月

2 戸籍／土地台帳2（中国の）

川北稔 責任編集『歴史学事典 13 所有と生産』弘文堂 pp. 193-194 2006年4月

3 広州

中国文化事典編集委員会 編『中国文化事典』丸善出版 pp. 112-113 2017年4月

杉原 達教授 履歴・研究業績

■履歴

I 学歴

1971年 3 月	甲陽学院高等学校卒業
1971年 4 月	京都大学経済学部入学
1975年 3 月	京都大学経済学部卒業
1975年 4 月	大阪市立大学大学院経済学研究科修士課程入学
1977年 3 月	大阪市立大学大学院経済学研究科修士課程修了
1977年 4 月	関西大学大学院経済学研究科博士課程入学
1980年 3 月	関西大学大学院経済学研究科博士課程単位修得退学
1979年10月～1981年 3 月	ドイツ連邦共和国ビーレフェルト大学歴史学部 留学 (DAAD奨学生)
1990年 9 月	博士（経済学）学位を取得（関西大学）

II 職歴

1977年 4 月	関西大学経済学部助手
1981年 4 月	関西大学経済学部専任講師
1984年 4 月	関西大学経済学部助教授
1991年 4 月	関西大学経済学部教授
1992年 4 月	大阪大学文学部助教授
1997年 5 月	大阪大学文学部教授
1999年 4 月	大阪大学大学院文学研究科教授

■研究業績

I 著書（単著）

1. 『オリエントへの道—ドイツ帝国主義の社会史』 藤原書店、1990年。
2. 『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究』 新幹社、1998年。
3. 『中国人強制連行』 岩波書店、2002年。

II 共編著

1. 『日本社会と移民』（講座・外国人定住問題 第1巻）、明石書店、1996年。（伊豫谷登士

翁と共編)

- ・「はじめに」(伊豫谷登士翁と共同執筆)
- ・「朝鮮人をめぐる対面＝言説空間の形成とその位相—1930年代の大阪を中心に」
- 2. 『岩波講座 アジア・太平洋戦争』全8巻、岩波書店、2005～06年。(倉沢愛子・成田龍一・テッサ・モーリス＝スズキ・油井大三郎・吉田裕と共編)
- ・「刊行にあたって」(上記5人と共同執筆)
- ・「帝国という経験—指紋押捺を問い直す視座から」(第1巻『なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』2005年)
- ・「まえがき」(第4巻『帝国の戦争経験』2006年)
- 3. 『西松安野友好基金和解事業報告書』(中国語版と日本語版)、西松安野友好基金運営委員会、2014年。
- ・「編集にあたって」(曲啓傑・張振侖・劉宝辰・川原洋子と共同執筆)

Ⅲ 論文など

1. 「バグダード鉄道論ノート (1)」、関西大学『経済論集』28巻1・2・3・4合併号、1978年。
2. “Ein neuer Ansatz zur Ideengeschichte bei Hans Rosenberg” in : *Kansai University Review of Economics and Business*, Vol. 7, Nos. 1 & 2, 1978.
3. 「バグダード鉄道論ノート (2)」、『経済論集』30巻4・5・6合併号、1981年。
4. 「帝国主義的ナショナリズムに関する覚書き—センメル『社会帝国主義史—イギリスの経験 1895-1914』によせて」『関西大学部落問題研究室紀要』9号、1983年。
5. 「ドイツ帝国主義における内政と外政—ドイツ帝国主義のバグダード鉄道政策に関する一考察」川本和良・箸方幹逸・高橋哲雄・大月誠・肥前栄一編『比較社会史の諸問題』未来社、1984年。
6. 「19世紀末ドイツのオリエン特認識—皇帝のオリエン特旅行に関する新聞報道を素材として」京都大学『経済論叢』136巻4号、1985年。
7. 「旧制関西大学に在籍した朝鮮人学生の修学状況」『関西大学人権問題研究室紀要』13号、1986年。
8. 「在阪朝鮮人の渡航過程—朝鮮・済州島との関連で」杉原薫・玉井金五編『大正／大阪／スラム』新評論、1986年(増補版1996年)。
9. 「バグダード鉄道論ノート (3)」『経済論集』38巻6号、1989年。
10. 「バグダード鉄道論ノート (4・完)」『経済論集』39巻1号、1989年。

11. ““Orientalism” in the German Empire : The Kaiser’s Journey in the Orient (1898) as an Example”, in : *Kansai University Review of Economics and Business*, Vol. 20, No. 1, 1991.
12. “Colonial Voyages to the “Manchester of the Orient” : A Social History of the Korean Migration to Osaka, 1923–1945”, in : *Kansai University Review of Economics and Business*, Vol. 20, No. 2, 1992.
13. 「大阪・今里からの世界史」板垣雄三編『世界史の構想』朝日新聞社、1993年。
14. 「在阪朝鮮人の定着過程—大阪市東成区ゴム工業における朝鮮人労働者を中心に」関西大学経済政治研究所編『大阪産業経済の研究』1995年。
15. 「戦時期大阪への中国人強制連行—調査研究の現状と課題」大阪大学文学部『待兼山論叢』（日本学篇）29号、1995年。
16. 「黄禍論」歴史学研究会編『強者の論理』東京大学出版会、1995年。
17. 「アジアとの出会い—文化交流史の視点から」柏木隆雄・山口修編『異文化の交流』大阪大学出版会、1996年。
18. 「二戦時期大阪的中国劳工」中共石家庄市党委史研究室党編『日軍侵華暴行（国際）學術研討會文集』新華出版社、1996年。
19. 「「均質で空虚な時間」をめぐって」『江戸の思想』4号、1996年。
20. 「阪神大震災と多言語放送—ミニFM局の意義」『言語』25巻8号、1996年。
21. “The Integration of Koreans into Japanese Urban Environment : The Growth of Foreign Workforce in the Rubber Industry of Prewar Osaka”, in : *Nihon Gakuho*, Osaka University, Faculty of Letters, No. 15, 1996.
22. 「春玉たち的大阪—在阪朝鮮人史研究序説」『ほるもん文化』7号、1997年。
23. 「東アジア民衆交流の里程標—1997年2月台湾シンポジウムによせて」『インパクション』101号、1997年。
24. 「思想としての「現場探訪」」『思想』877号、1997年。
25. 「中国人強制連行と私たち—安野・西松を中心に」『広島教育』554号、1999年。
26. 「ドイツにおける帝国意識—世紀転換期におけるオリエントとの関係を中心に」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999年。
27. 「責任のありか—中国人強制連行問題からの一考察」関西大学経済政治研究所編『大阪問題の研究』1999年。
28. 「帝国の腹のなかで—帝国意識研究のための覚書き」大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』19号、2000年。

29. 「大阪・今里からの世界史再論」安田常雄・佐藤能丸編『思想史の発想と方法』（展望・日本歴史第24巻）、東京堂出版、2000年。
30. 「「龍の簪」をさして―梁石日『雷鳴』をよむ』『ユリイカ』32巻15号、2000年。
31. 「西松建設の中国人強制連行への関与と企業責任について」『歴史に正義と公道をⅡ』中国人強制連行・西松建設裁判を支援する会、2001年。
32. 「越境する魂」『環』5号、2001年。
33. 「人がつながるといふこと」大阪経済法科大学『東アジア研究』33号、2001年。
34. 「越境考―「越境の中の近現代日本」特集にあたって」『日本学報』22号、2003年。
35. 「帝国との向き合いかた―中国人強制連行研究を通じて」『歴史学研究』776号、2003年。
36. 「記憶のゆくえ」、川村邦光編『戦死者のゆくえ―語りと表象から』青弓社、2003年。
37. 「日本と台湾、アジアの戦後史の闇」、徐勝編『東アジアの冷戦と国家テロリズム』お茶の水書房、2004年。
38. 「帝国との向き合いかた―中国人強制連行の戦後」歴史学研究会編『帝国への新たな視座』青木書店、2005年。
39. 「中国人強制連行」、金富子・中野敏男編『歴史と責任―「慰安婦」問題と1990年代』青弓社、2008年。
40. 「中国人強制連行に関与した土木建築企業に対する国家補償金供与について」『日本学報』28号、2009年。
41. 「在阪朝鮮人の歴史的形成・展開と日本の社会意識―大阪の場から考える」増谷秀樹編『移民・難民・外国人労働者と多文化共生』有志舎、2009年。
42. 「いま、指紋押捺を再考する」『日本学報』29号、2010年。
43. 「発信する「猪飼野」―2009年8月・大阪府立桃谷高校の試みから」神戸大学大学院人文科学研究科海港都市研究センター『海港都市研究』5号、2010年。
44. 「中国人強制連行に関与した土木建築企業に対する国家補償金供与について」『歴史に正義と公道をⅤ』中国人強制連行・西松建設裁判を支援する会、2010年。
45. 「越境と文化」『日本学報』34号、2014年。
46. 「中国人強制連行・西松安野和解事業とその意義―『和解報告書』の刊行によせて」『歴史学研究』931号、2015年。

Ⅳ 科学研究費補助金研究成果報告書

1. （単著）『第二次世界大戦期日本の中国人強制連行に関する社会経済史的研究―大阪を中心に』平成7～8年度 科学研究費補助金基盤研究C（2）、1997年。

2. (単著)『戦時期日本の中国人強制連行に関する歴史的研究』平成15～17年度 科学研究費補助金基盤研究C (2)、2006年。
3. (分担執筆)「見つめる人びと—強制連行された中国人家族の写真から」、川村邦光編『家族写真の歴史民俗学的研究』2009年。

V 書評

1. 「思想の社会史のために—ハンス・ローゼンベルク『ドイツ3月前期における政治思想の諸潮流』(1972)を読んで」『経済論集』27巻2号、1978年。
2. 森田桐郎編『国際労働力移動』『社会経済史学』53巻6号、1988年。
3. D・ダビディーン『大英帝国の階級・人種・性—W・ホガースにみる黒人の図像学』慶應義塾大学『三田学会雑誌』86号3号、1993年。
4. C・シュテルン／H・A・ヴィンクラー編『ドイツ史の転換点 1848-1990』『社会経済史学』60巻2号、1994年。
5. 栗原優『第二次世界大戦の勃発—ヒトラーとドイツ帝国主義』『西洋史学』177号、1995年。
6. 西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』『社会経済史学』64巻4号、1998年。
7. 木畑洋一編『大英帝国と帝国意識』『イギリス帝国史研究会 Discussion Paper』2号、1999年。
8. 谷富夫編『民族関係における結合と分離—社会的メカニズムを解明する』『部落解放研究』154号、2003年。
9. 徐勝『東アジアの国家暴力と人権・平和』『立命館法学』342号、2012年。

VI 解説・紹介・小文など

1. 「特定の思想家(日本人)を主題とする研究雑誌目録」『社会思想史研究』5号、1981年。(杉原四郎と共同執筆)
2. 「特定の思想家(外国人)を主題とする研究雑誌目録」『社会思想史研究』6号、1982年。(杉原四郎と共同執筆)
3. 「第16回国際歴史学会議に出席して」『経済論集』35巻6号、1986年。
4. 「現代の「集団部落」の中で」『歴史と社会』8号、1988年。
5. 「特定の思想家を主題とする研究雑誌拾遺」『社会思想史研究』12号、1988年。(杉原四郎と共同執筆)
6. 「霧社への旅」関西大学人権問題研究室『室報』5号、1990年。

7. 「オリエントへの鉄の道」『機』 3号、1990年。
8. 「近年の台湾における台湾近現代史研究の興隆—初歩的な紹介」『経済論集』 41巻1号、1991年。
9. 「特定の思想家を主題とする研究雑誌目録拾遺(続)」『社会思想史研究』15号、1991年。(杉原四郎と共同執筆)
10. 「台湾における民衆・民族・民主運動史の継承」関西大学人権問題研究室『室報』 8号、1992年。
11. 「上方落語「代書」に思う」『季刊青丘』 16号、1993年。
12. 「ショウヴィニズム—国家意識／排外意識／生活保守意識」竹内実・西川長夫編『比較文化キーワード①』サイマル出版会、1994年。
13. 「「安息歌」と「国際歌」—林書揚さんのこと」『影書房通信』 3号、1994年。
14. 「問題提起」『報告集：中国人強制連行国際シンポジウム大阪集会』同実行委員会、1997年。
15. 「なにわ民衆史の生き字引—平井正治さんのこと」『機』 69号、1997年。
16. 「コメント」史学会例会シンポジウム「ヨーロッパ移民の社会史(17～20世紀)」『史学雑誌』 110編8号、2001年。
17. 「記憶がよみがえり、保ち続けられるということ」岩波講座『近代日本の文化史8』月報、2002年。
18. 「息の長い国際交流を」大阪大学大学院文学研究科『国際交流センター室報』 46号、2003年。
19. 「解説」松村高夫著『日本帝国主義下の植民地労働者』不二出版、2007年。
20. 「絶句した徐勝さん」徐勝先生退職記念事業実行委員会(日本・韓国)編『東アジアのウフカジ』かもがわ出版、2011年。
21. 「強制連行された中国人と平井さん」鈴木武編『釜ヶ崎と共に生きて 平井正治追悼集』2012年。
22. 「「アジア」を問う場」、藤原書店編集部編『「アジア」を考える2000～2015』藤原書店、2015年。
23. 「相声のこと、麻花のこと」広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会『Newsletter』 19号、2017年。

VII 座談会・シンポジウム

1. 「シンポジウム 阪神大震災と戦後日本」藤原書店編集部編『震災の思想』藤原書店、

1995年。

2. (大谷晃一・塩沢由典・橋爪紳也・河内厚郎と座談会)「大阪のグランドデザイン」『環』9号、2002年。
3. (上田正昭・姜尚中・朴一と座談会)「歴史のなかの「在日」」藤原書店編集部編『歴史のなかの「在日」』藤原書店、2005年。

VII 翻訳

1. H.モムゼン「ヴァイマル共和国におけるドイツ社会民主党と自由労働組合」『歴史と社会』4号、1984年。
2. ルートヴィッヒ・フォン・フリーデブルク「ドイツにおける労使関係」(久本憲夫と共訳)『日本労働協会雑誌』326号、1986年。
3. J.コッカ『歴史と啓蒙』(肥前栄一と共訳) 未来社、1994年。
4. H.A.ヴィンクラー『ドイツ中間層の政治社会史 1871～1990年』(後藤俊明・奥田隆男・山中浩司と共訳) 同文館、1994年。

VIII 事典項目

1. 「帝国主義」『世界民族問題事典』平凡社、1995年。
2. 「オリエント」『歴史学事典』第3巻、弘文堂、1995年。
3. 「トルコ」『マルクス・カテゴリー事典』青木書店、1998年。
4. 「大塚久雄」「田中正造」「野呂栄太郎」「日本資本主義発達史」「日本資本主義発達史講座」「日本資本主義論争」「矢内原忠雄」『日本思想史事典』ぺりかん社、2001年。
5. 「君が代丸」「東亜通航組合」『在日コリアン辞典』明石書店、2010年。
6. 「戦争と人の移動」『人の移動事典』丸善出版、2013年。
7. 「中国人強制連行」『平和と安全保障を考える事典』法律文化社、2016年。

高橋文治教授 履歴・研究業績

学 歴

- 1972年 4 月 京都大学文学部入学
 1976年 3 月 同大学同学部・中国語学中国文学専攻卒業
 1977年 4 月 京都大学大学院文学研究科・博士前期課程・中国語学中国文学専攻入学
 1979年 3 月 同大学院同研究科・博士前期課程・中国語学中国文学専攻修了
 1979年 4 月 同大学院同研究科・博士後期課程・中国語学中国文学専攻進学
 1982年 3 月 同大学院同研究科・博士後期課程・中国語学中国文学専攻退学

職 歴

- 1982年 4 月 追手門学院大学文学部講師
 1985年 4 月 追手門学院大学文学部助教授
 1995年 4 月 追手門学院大学文学部教授
 2000年10月 大阪大学大学院文学研究科教授

主要業績

著 書

1. 『『董解元西廂記諸宮調』研究』（共著 全514頁）（汲古書院 1998年 2 月）
2. 『成化本『白兔記』の研究』（共著 全400頁）（汲古書院 2006年 9 月）
3. 『元刊雜劇の研究』（共著 全409頁）（汲古書院 2007年10月）
4. 『烏臺筆補の研究』（共著 全354頁）（汲古書院 2007年12月）
5. 『中国文学のチチェローネ』（共 pp. 1-58 pp. 112-135 pp. 238-262）（汲古書院2009年 3 月）
6. 『元刊雜劇の研究（二）』（共著 全280頁）（汲古書院 2011年 5 月）
7. 『モンゴル時代道教文書の研究』全496頁（汲古書院 2011年12月）
8. 『元刊雜劇の研究（三）』（共著 全304頁）（汲古書院 2014年 9 月）
9. 『皇帝のいる文学史』（共著 pp. 213-328）（大阪大学出版会 2015年 4 月）
10. 『元典章が語ること』（共著 pp. 1-38 pp. 173-266）（大阪大学出版会 2017年 3 月）

論 文 等

1. 「金末の士風と元曲」（『中国文学報』第34冊 1982年10月）
2. 「元遺山と党争」（『追手門学院大学文学部紀要』第16号 1982年12月）

3. 「李逵像の検討—院本・元曲から『水滸伝』へ—」(「東方学」第67輯 1984年1月)
4. 「元好問「論詩三十首」とその周辺」(「日本中国学会報」第37集 1985年10月)
5. 「泰山学派の末裔達——二・三世紀山東の学芸について—」(「東洋史研究」45/1 1986年6月)
6. 「蕩児の生涯」(「追手門学院大学創立二十周年記念論集・文学部篇」1987年3月)
7. 「J.S.ウィクステッド訳注「元好問『論詩絶句』」書評」(「中国文学報」第38冊 1987年10月)
8. 「元刊本「薛仁貴衣錦還郷」劇をめぐる」(「東方学」第76輯 1988年7月)
9. 「金元墓の孝子図と元曲」(「未名」第8号 1988年12月)
10. 「『長恨歌』とその子孫たち」(「東洋文化学科年報」5 1990年11月)
11. 「太宗オゲデイ癸巳年皇帝聖旨訳注」(「追手門学院大学文学部紀要」第25号 1991年12月)
12. 「崔府君をめぐる—元代の廟と伝説と文学—」(『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』汲古書院 1991年3月)
13. 「狩獵のたのしみ—元代散曲と卷狩—」(「東洋文化学科年報」6 1991年)
14. 「元朝文学の超俗と“滑稽”」(『月刊しにか』3/5 大修館書店 1992年5月)
15. 「漂泊者の神話—成化本説唱詞話と包拯—」(「中日文化研究」3 1992年7月)
16. 「恋の陶醉—元代散曲と『会真記』—」(「東洋文化学科年報」7 1992年11月)
17. 「死と漂白のフォークロア—中国の流離譚が語るもの—」(追手門学院大学東洋文化研究会編『旅の文化史』駸々堂 1993年4月)
18. 「女のたくらみ—『水滸伝』の世界—」(「東洋文化学科年報」8 1993年11月)
19. 「掌中のたまご—関漢卿の世界—」(追手門学院大学東洋文化研究会編『エロスの文化史』勁草書房 1994年5月)
20. 「モンゴル時代全真教文書の研究(一)」(「追手門学院大学文学部紀要」第31 1995年12月)
21. 「原穀・元覚考」(「東洋文化学科年報」10 1995年11月)
22. 「晋祠至元四年碑をめぐる」(「追手門学院大学創立三十周年記念論集・文学部篇」1997年3月)
23. 「下男の老年—中国古典演劇の人間模様—」(追手門学院大学東洋文化研究会編『老いの文化史』新泉社 1997年2月)
24. 「汲水遇子と磨房重会—明代『白兔記』の演変—」(「阿頼耶順宏・井原澤周両先生退休記念論集『アジアの歴史と文化』」汲古書院 1997年4月)
25. 「モンゴル時代全真教文書の研究(二)」(「追手門学院大学文学部紀要」第32 1997年3月)
26. 「モンゴル時代全真教文書の研究(三)」(「追手門学院大学文学部紀要」第33 1997年12月)

27. 「至元十七年の放火事件」(「東洋文化学科年報」第12 1997年11月)
28. 「李三娘の物語」(「東方学会創立五十周年年記念東方学論集」財団法人東方学会 1997年5月)
29. 「張留孫の登場前後—発給文書から見たモンゴル時代の道教—」(「東洋史研究」56/1 1998年6月)
30. 「承天観公抛をめぐって」(「追手門学院大学文学部紀要」第35 1999年12月)
31. 「クビライの令旨二通」(「アジア学科年報」2 1999年11月)
32. 「傍観者の目」(『他文化を受容するアジア』「和泉選書」123 2000年3月)
33. 「モンゴル王族と道教—武宗カイシャンと苗道—」(「東方宗教」93号 2000年5月)
34. 「「任風子」劇をめぐって」(「興膳教授退官記念中国文学論文集」汲古書院 2000年3月)
35. 「元の白話碑—チンギス汗たちの発令文—」(『月刊しにか』12/3 大修館書店 2001年3月)
36. 「田仲一成著『明清の戯曲』書評」(「中国文学報」第63冊 2001年10月)
37. 「もう一つの『金瓶梅』論」(懷徳堂記念会編『中国四大奇書の世界』和泉書院 2003年1月)
38. 「山西潞城県李庄文廟金元三碑」(「大阪大学大学院文学研究科紀要」第44 2004年3月)
39. 「その後の『柳毅伝』」(「桃の会論集」2 2004年3月)
40. 「森田憲司著『元代知識人と地域文化』書評」(「東洋史研究」63/4 2005年3月)
41. 「宮紀子著『モンゴル時代の出版文化』書評」(「東洋史研究」65/3 2006年12月)
42. 「馬潜龍太子の物語—「説唱詞話」は何を語ったか—」(田仲一成・小南一郎・斯波義信編『中国近世文芸論—農村祭祀から都市文芸へ—』所収 東洋文庫 2009年12月)
43. 「1258年山西浮山県天聖宮給文二碑札記」(「内陸アジア言語の研究」XXV 2010年10月)
44. 「孤山を論じて古楽府に及ぶ」(「アジア学科年報」6号 2012年12月)
45. 「枕上のユートピア」(「アジア学科年報」第7号 2013年12月)
46. 「〈肆筆〉の文学」(荒木浩編『中世の随筆—成立・展開と文体—』竹林舎 2014年8月)
47. 「モンゴルが見た道教」(「知のユーラシア4『宇宙を駆ける知—天文・易・道教—』明治書院」2014年1月)
48. 「つまの死のうた」(荒木浩編『夢見る日本文化のパラダイム』法蔵館 2015年5月)
49. 「東の間の幻影—舒元興の文学—」(「待兼山論叢」50文学篇 2016年12月)

浜渦辰二教授 略歴・研究業績一覧

■略歴

I. 常勤略歴

1952年11月	高知県に生まれる
1976年 3 月	静岡大学人文学部人文学科（哲学）卒業
1976年 4 月～1977年 3 月	九州大学文学部研究生
1977年 4 月～1980年 3 月	九州大学大学院文学研究科博士前期課程（哲学）
1980年 4 月～1984年 3 月	九州大学大学院文学研究科博士後期課程（哲学）
1984年 4 月～ 8 月	日本学術奨励会研究員
1984年 9 月～1986年 9 月	DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生として（旧西）ドイツ・ケルン大学及びヴッパータール大学留学
1986年10月～1987年 3 月	九州大学文学部研究生
1989年10月～1991年 3 月	九州大学文学部助手
1991年 4 月～1996年 3 月	静岡大学人文学部助教授
1996年 4 月～2008年 3 月	静岡大学人文学部教授
1997年 4 月～2008年 3 月	静岡大学大学院人文社会科学研究科（臨床人間科学）兼任教授
2004年 4 月～2011年 3 月	名古屋大学大学院医学研究科博士後期課程（精神医学）
2008年 3 月	静岡大学名誉教授
2008年 4 月～	大阪大学大学院文学研究科教授
2018年 3 月	大阪大学を定年退職

II. 非常勤講師等の履歴

1987年～1989年	西南学院大学
1988年～1989年	福岡工業大学
1997年	岡山大学文学部集中講義
1997年～2006年	静岡赤十字看護専門学校
1998年～2008年	静岡市立静岡看護専門学校
1999年	名古屋大学文学部集中講義
2001年	国公立機関連携講義
2003年～2006年	清水市立看護専門学校
2003年～2004年	早稲田大学大学院文学研究科集中講義
2003年	中央大学文学部集中講義

2005年	静岡県健康福祉部「看護教員養成講習会」
2005年～2007年	愛知医科大学看護学部
2005年～2006年	東海アクシス看護専門学校
2006年	NHK市民講座
2006年～2007年	放送大学面接授業（集中型）
2007年	静岡県人材養成室・看護教員養成講座
2011年	立命館大学文学部
2012年, 2013年, 2017年	ハイデルベルク大学日本学研究所
2015年～2017年	上智大学グリーンフケア研究所人材養成講座

Ⅲ. 学会・研究会等会員・役員等

西日本哲学会	1978年4月～2017年3月（中部地区委員の時期を含む）
九州大学哲学会	1980年4月～現在（評議委員の時期を含む）
日本現象学会	1986年10月～現在（国際交流委員長、編集委員長、委員の時期を含む）
日本哲学会	1987年4月～現在（編集委員の時期含む）
日本倫理学会	1989年4月～2017年3月
静岡大学哲学会	1991年4月～現在（理事の時期を含む）
中部哲学会	1995年4月～2017年3月（委員・編集委員の時期を含む）
フッサール研究会	2002年3月～現在（呼びかけ人の時期を含む）
「ケアの人間学」合同研究会	2002年4月～2009年3月（世話人）
静岡県治験ネットワーク中央倫理委員会委員	2004年4月～2008年3月
「ケアの臨床哲学」研究会	2009年8月～現在（2017年3月まで代表）
日本現象学・社会科学会	2009年4月～現在（2012年より委員）
日本学術振興会学術システム研究センター人文社会系部会専門研究員	2009年4月～2012年3月
日本生命倫理学会	2011年4月～2017年3月（大会実行委員の時期を含む）
日本臨床死生学会	2011年4月～11月（企画委員）
臨床実践の現象学会	2015年8月～現在（賛同人）

■業績一覧

I. 著書

【単著書】

1. 『フッサール間主観性の現象学』 創文社, 1995.2, pp. 1-352

【共著書・分担執筆】

1. 柏田康史・浜渦辰二・末吉康幸・広川明『哲学するために』北樹出版（分担執筆：「第2章 他者」, 1991.5, pp. 45-97
2. 金子晴勇編『人間学—その歴史と射程—』創文社（分担執筆：「7 人間と歴史」）1995.4, pp. 213-227
3. 吉村仁・竹内浩昭・中桐齊之編『脱・環境ホルモンの社会』三学出版（分担執筆：「第3章 ヒトに与える影響, 第5節 キレる子どもたち」「第4章 生物と環境, 第3節 生物から見た環境」「第5章 地球環境と未来, 第2節 脱・環境ホルモンの道」）2002.4, pp. 73-81, pp. 99-103, pp. 111-114
4. *Die erscheinende Welt. Festschrift für Klaus Held.* Hrsg. von Heinrich Hüni und Peter Trawny. Duncker & Humblot, Berlin（分担執筆：“Zur Phänomenologie des Unsichtbaren: Husserl und Heidegger”）2002.12, pp. 725-736
5. 静岡大学教養教育「哲学・思想分野」分科会編『哲学思想への誘い』教養教育「哲学・思想分野」分科会（分担執筆：「第5章 現代の問題の根を求めて哲学の問いへ」「私の哲学思想への手引き」）2003.3, pp. 68-84, pp. 143-147
6. 統合学研究所編『複雑系、諸学の統合を求めて』晃洋書房, 統合学研究叢書第2巻（分担執筆：「フッサールと自己組織性」）2005.4, pp. 277-291
7. *Symposium zur Gründung einer Deutsch-Japanischen Akademie für integrative Wissenschaft*, hrsg. von Daiseion-ji e.V. und der Wilhelm Gottfried Leibniz Gemeinschaft e.V., J. H. Röhl Verlag（分担執筆：“Phänomenologie und das sich organisierende System”）2005.10, pp. 108-118
8. 統合学研究所編『「統合学」へのすすめ』晃洋書房, 統合学研究叢書第3巻（分担執筆：「脳科学と現象学」）2007.1, pp. 348-367
9. 木村敏・坂部恵監修『〈かたり〉と〈作り〉 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所（分担執筆「ナラティブとパースペクティヴ—「〈かたり〉の虚と実」をめぐる—」）2009.1, pp. 95-119
10. *Alfred Schutz and his intellectual partners*, ed. by Hisashi Nasu, Lester Embree, George Psathas, Ilja Srubar. UVK Verlagsgesellschaft（分担執筆：“Schutz and Edmund

- Husserl — For Phenomenology of Intersubjectivity —”) 2009, pp. 49-67
11. 松田純・江口昌克・正木祐史編『ケースブック 心理臨床の倫理と法』知泉書館（分担執筆「ケース9 終末期の心理臨床」）2009.3, pp. 153-160
 12. *Identity and Alterity — Phenomenology and Cultural Traditions* —, ed. by Kwok-Ying Lau, Chan-Fai Cheung, Tze-Wan Kwan. Orbis Phaenomenologicus, Königshausen & Neumann（分担箇所：“Identity and Alterity — Schutz and Husserl on Phenomenology of Intersubjectivity— ”）2010.12, pp. 99-112
 13. *Soziale Erfahrung, Phänomenologische Forschungen, Im Auftrage der Deutschen Gesellschaft für phänomenologische Forschung*, hrsg. von Dieter Lohmar und Dirk Fonfara（分担執筆：“Caring und Phänomenologie - aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intersubjektivität”）2013, pp. 113-127
 14. *BORDER-CROSSING — Phenomenology, Interculturality and Interdisciplinary*, ed. by Kwok-ying Lau / Chung-Chi Yu, Orbis Phaenomenologicus, Königshausen & Neumann（分担執筆：“Towards a Phenomenological Approach to the Problem of Organ Transplantation after Brain Death”）2014, pp. 147-157
 15. 木村敏・野家啓一監修『臨床哲学とは何か 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所（分担執筆「二つの「臨床哲学」が再会するとき」）2015.1, pp. 262-279

【編著書】

1. 『いのちとこころに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築』科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書，2002.2, pp. 1-201
2. PROCEEDINGS OF THE FIRST INTERNATIONAL MEETING FOR HUSSERL STUDIES IN JAPAN, 第1回フッサール研究国際会議 in Japan『予稿集』, 2002.11, pp. 1-118
3. 『フッサール研究』創刊号／科学研究費補助金・基盤研究（B-1）研究成果報告書, 2003.3, pp. 1-306
4. 『ケアの人間学』No. 1, 合同研究会編, 2004.3, pp. 1-38
5. PROCEEDINGS OF THE FOURTH INTERNATIONAL MEETING FOR HUSSERL STUDIES IN JAPAN, 第4回フッサール研究国際会議 in Japan『予稿集』, 2004.11, 1-159
6. 『フッサール研究』第3号／平成16年度科学研究費補助金・基盤研究（B-1）研究成果報告書, 2005.3, pp. 1-250
7. 『ケアの人間学 —合同研究会要旨集—』No. 2, 合同研究会編, 2005.3, pp. 1-28

8. 平成16年度「臨床と法」研究会研究報告書, 静岡大学人文学部長裁量経費, 2005.3, pp. 1-105
9. 『〈ケアの人間学〉入門』知泉書館, 2005.11, pp. 1-230
10. 『対人援助の倫理と法／「臨床と法」研究会活動報告』第1号, 科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書, 2006.2, pp. 1-82
11. 『対人援助の倫理と法／「臨床と法」研究会活動報告』第2号, 科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書, 2007.2, pp. 1-72
12. 『対人援助の倫理と法／「臨床と法」研究会活動報告』第3号, 科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書, 2008.3, pp. 1-178
13. 『ケアの臨床哲学—シンポジウムの記録—』, 2012.3, pp. 1-274
14. シリーズ『生命倫理学』第14巻「看護倫理」, 浜渦辰二・宮脇美保子責任編集, 2012.7, pp. 1-259
15. 『看護研究』Vol. 45-05: 特集「北欧ケアとは何か 看護研究への示唆」, 医学書院, 2012.8, pp. 428-474
16. 『いま、北欧ケアを考える』平成22-24年度科学研究費補助金基盤研究(B)〔海外学術調査〕「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」研究成果報告書, 2013.3, pp. 1-237

【編書】

1. 『ディアロゴス—哲学・倫理学会研究報告—』創刊号, 九州大学哲学・倫理学会編集委員会, 1988.3, pp. 1-52
2. 『静岡大学フォーラム』創刊号, 静岡大学広報委員会発行, 2000.3, pp. 1-52
3. 『静岡大学フォーラム』第2号, 静岡大学広報委員会発行, 2000.9, pp. 1-36
4. 『静岡大学フォーラム』第3号, 静岡大学広報委員会発行, 2001.6, pp. 1-38
5. PROCEEDINGS OF THE SECOND INTERNATIONAL MEETING FOR HUSSERL STUDIES IN JAPAN, 第2回フッサール研究国際会議 in Japan『予稿集』, 2003.3, pp. 1-113
6. PROCEEDINGS OF THE THIRD INTERNATIONAL MEETING FOR HUSSERL STUDIES IN JAPAN, 第3回フッサール研究国際会議 in Japan『予稿集』, 2003.11, pp. 1-144
7. 『フッサール研究』第2号／平成15年度科学研究費補助金・基盤研究(B-1)研究成果報告書, 2004.3, pp. 1-208
8. 『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』No. 3, 合同研究会編, 2006.2, pp. 1-20

9. 『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』 No. 4, 合同研究会編, 2007.3, pp. 1-32
10. 『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』 No. 5, 合同研究会編, 2008.3, pp. 1-36
11. 『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』 No. 6, 合同研究会編, 2009.3, pp. 1-34

Ⅱ. 論文

【単著論文：日本語】

1. 「フッセルにおける「心身」問題」『哲学論文集』（九州大学哲学会）第18輯, 1982.9, pp. 47-67
2. 「他者経験の構造と発生—フッサール『デカルト的省察』を読み直す—」『哲学論文集』（九州大学哲学会）第23輯, 1987.9, pp. 23-42
3. 「経験と言語への一考察—フッサール現象学からの／へのアプローチ—」『ディアロゴス』（九州大学哲学倫理学会）創刊号, 1988.3, pp. 3-18
4. 「時間と他者のアナロジー—地平と間主観性の現象学・序説—」『哲學』（日本哲学会）第38号, 1988.5, pp. 178-188
5. 「言語と他者についての一考察—間主観性の現象学における構造と発生—」『ディアロゴス』（九州大学哲学倫理学会）第2号, 1989.4, pp. 47-60
6. 「他者と異文化—フッサール間主観性の現象学の一側面—」『哲学年報』（九州大学文学部紀要）第49輯, 1990.3, pp. 289-314
7. 「相対性の復権と相対主義の陥穽」『現象学年報』（日本現象学会編）第6号, 1990.10, pp. 35-50
8. 「他者と言語」『哲学年報』（九州大学文学部紀要）第50輯, 1991.3, pp. 111-140
9. 「フッサールにおける生世界」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第9号, 1991.11, pp. 55-74
10. 「文化の現象学のために」『人文論集』（静岡大学人文学部）第43号の2, 1993.1, pp. 111-151
11. 「空間の現象学にむけて」『人文論集』（静岡大学人文学部）第44号の2, 1994.1, pp. 71-108
12. 「幾何学的空間と生きられる空間」『人文論集』（静岡大学人文学部）第45号の1, 1994.7, pp. 97-129
13. 「「超越論的他者」とは何だったのか？」『現象学年報』（日本現象学会）第10号, 1995.1, pp. 149-163
14. 「フッサール・データベースについて」『人文論集』（静岡大学人文学部）第46号の1, 1995.7, pp. 1-49

15. 「インターネットを利用した哲学研究のために—フッサール・データベースの新段階—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第47号の1，1996.7，pp. 1-24
16. 「時間・他者・身体—フッサールの反デカルト的省察—」『中部哲学会紀要』（中部哲学会）第29号，1997.3，pp. 13-27
17. 「峠を越えたフッサール・データベース —インターネット時代のマルチリンガル・テキストのために—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第48号の1，1997.7，pp. 1-29
18. 「見えないものの現象学のために」『西日本哲学年報』（西日本哲学会）第5号，1997.10，pp. 83-94
19. 「人文科学とデータベース」『広領域分野における学術・教育資料の情報体系分析と情報資源化に関する基礎的研究』静岡大学学内特定研究成果報告書，1998.3，pp. 35-51
20. 「時事的関心から現象学的関心へ—進化するフッサール・データベース—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第49号の1，1998.7，pp. 1-26
21. 「対話の現象学のために：フッサールとハイデガー」『人間存在論』（京都大学大学院人間・環境学研究科、総合人間学部『人間存在論』刊行会）第6号，2000.3，pp. 37-47
22. 「対話の現象学にむけて—現象学の可能性をめぐる—」『哲学論文集』（九州大学哲学会）第36輯，2000.9，pp. 97-114
23. 「報告：臨床人間学の試み」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第18号，2001.7，pp. 31-38
24. 「精神医学と現象学の対話のために—フッサールとハイデガーをてがかりに—」『いのちとところに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築』（平成12・13年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書），2002.2，pp. 41-51
25. 「対話の現象学への一つのアプローチ「父性の不在」論をめぐる—」『いのちとところに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築』（平成12・13年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書），2002.2，pp. 79-91
26. 「末期がん患者の精神医療のあり方をめぐって—ケアの人間学へむけて—」『いのちとところに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築』（科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書），2002.2，pp. 117-136
27. 「フッサールにおける論理と世界—様相論理と可能世界意味論に寄せて—」『中部哲学会紀要』（中部哲学会）第34号，2002.3，pp. 153-169
28. 「フッサールにおける自然と精神—『イデーⅡ』から『自然と精神』へ—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第53号の1，2002.7，pp. 1-18
29. 「フッサールにおける現象学と存在論」『立命館哲学』第15集，2004.3，pp. 1-18

30. 「研究活動報告：「ケアの人間学」と「生命ケアの比較文化論」」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第22号，2005.11，pp. 1-10
31. 「フッサール哲学から見た間主観性の発達」『乳幼児医学・心理学研究』（日本乳幼児医学・心理学会），2005.12，pp. 1-7
32. 「魂のケアについて—仏独・ホスピスとスピリチュアル・ケア研修報告—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第56号の2，2006.1，pp. 1-23
33. 「ケアの人間学—高齢者ケアのために—」『生命ケアの比較文化論的研究とその成果に基づく情報の集積と発信』科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（代表：松田純），2006.3，pp. 290-297
34. 「高齢者ケアのために」『人文論集』（静岡大学人文学部）第57号の1，2006.7，pp. 1-14
35. 「報告：看板を「哲学」から「人間学」に替えた一つの試み」『中部哲学会年報』（中部哲学会）第37号，2006.9，pp. 1-11
36. 「生と死をケアすること—ケアの現象学的人間学から—」『哲學』（日本哲学会）No. 58，2007.4，pp. 79-96
37. 「緩和ケアと尊厳—ケアの現象学的人間学からのアプローチ—」『緩和ケア』（青海社）2007年9月特集号，2007.9，pp. 395-398
38. 「死生観を育てよう—「ケアの人間学」合同研究会—」『臨牀看護』（へるす出版）11月号（Vol. 33, No. 13），2007.11，pp. 2011-2015
39. 「高齢者ケアの倫理と法をめぐって—北欧の高齢者ケア視察研修報告—」『対人援助の倫理と法—「臨床と法」研究会活動報告—』（科学研究費報告書）第3号，2008.3，pp. 97-106
40. 「フッサールとシュッツ—対話としての臨床哲学のために—」『メタフュシカ』（大阪大学大学院文学研究科哲学講座）第39号，2008.12，pp. 13-23
41. 「スピリチュアルケアと臨床哲学」『緩和ケア』（青海社），2009.1，pp. 31-33
42. 「私の考える臨床哲学—私はどこから来て、どこへ行くのか—」『臨床哲学』第10号，2009.3，pp. 3-20
43. 「ビジネス・倫理・ケア」『西日本哲学会年報』（西日本哲学会）第17号，2009.10，pp. 93-110
44. 「日本における高齢者ケアを考える」『ボローニャプロセス以後の欧米を中心として大学制度の変貌と新しい学問状況』（南山大学地域研究センター共同研究報告），2010.3，pp. 11-17
45. 「脳死臓器移植問題への現象学的アプローチにむけて」大阪大学文学会編『待兼山論叢』

- 第45号, 2010.12, pp. 1-17
46. 「二つの「臨床哲学」」『臨床精神病理』（日本精神病理・精神療学会), 2010.12, pp. 143-146
 47. 「人間の成熟をめぐる一成熟の間主観性という次元一」『哲学と現代』（名古屋哲学研究会）第26号, 2011.2, pp. 6-19
 48. 「生老病死について」『最期の居場所—暮らしの中のホスピス』（NPO法人愛逢）, 2011.7, pp. 6-25
 49. 「ビジネスとケアをつなぐ倫理」『異文化コミュニケーション23』（神田外語大学異文化コミュニケーション研究所）, 2011.10, pp. 123-132
 50. 「ケアの現象学への途上で—故・渡邊美千代を偲んで—」『メタフュシカ』（大阪大学大学院文学研究科哲学講座）第42号・鷺田清一名誉教授退職記念号, 2011.11, pp. 9-22
 51. 「直観とそれを隠れて支えているもの—「直観と倫理」へのフッサール現象学からのアプローチ—」『倫理学研究』（関西倫理学会）第42号, 2012.6, pp. 13-24
 52. 「ケアの倫理と看護」『看護倫理』（丸善出版, シリーズ『生命倫理学』第14巻 第10章）, 2012.7, pp. 195-217
 53. 「応用現象学とケア論—北欧現象学との交流のなかから—」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第29号, 2012.7, pp. 1-14
 54. 「北欧ケア研究のために」『看護研究』（医学書院）Vol. 45-05：特集「北欧ケアとは何か 看護研究への示唆」, 2012.8, pp. 426-438
 55. 「和辻哲郎の「人間学としての倫理学」」『臨床哲学』Vol. 14-1, 2012.9, pp. 2-15
 56. 「北欧ケアと日本のケア—哲学の立場からの比較—」『地域リハビリテーション』（三輪書店）第7巻第12号, 2012.12, pp. 1042-1045
 57. 「現代日本における死をめぐる状況」『Humanitas』（玉川大学人文学研究センター）第4号, 2013.3, pp. 162-173
 58. 「ケアの現象学にむけて—現象学の可能性をめぐる（二）—」『哲学論文集』（九州大学哲学会）第49輯, 2013.9, pp. 109-126
 59. 「ケアを支えるシステムについての一考察」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第30号, 2013.9, pp. 39-56
 60. 「尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか？—日本とヨーロッパ3国の比較考察—」『メタフュシカ』（大阪大学大学院文学研究科哲学講座）第45号・中岡成文退職記念号, 2014.12, pp. 1-14
 61. 「生老病死と共に生きる—ケアの臨床哲学にむけて—」『哲學』（日本哲学会）No. 66,

2015.4, pp. 45-61

62. 「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実—自律と依存を両立させる試み—」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第32号，2015.8, pp. 1-17
63. 「グリーフケアのために—臨床哲学からのアプローチ—」『グリーフケア』（上智大学グリーフケア研究所）第4号，2016.3, pp. 3-18

【単著論文：英語】

1. “Nature and Spirit — from Ideas II to Nature and Spirit —”, 『人文論集』（静岡大学人文学部）第53号の2，2003.1, pp. 1-12
2. “From Ideas II to Nature and Spirit”, ORGANIZATION OF PHENOMENOLOGICAL ORGANIZATIONS: Website, 2003.2.
3. “Caring from the Phenomenological Point of View — Decision-making in terminal care in Japan —”, 人文論集（静岡大学人文学部）第58号の2，2008.1, pp. 1-15
5. “Caring from the Phenomenological Point of View — Decision-making in terminal care in Japan —”, 『「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み』科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（代表：榊原哲也），2009.3, pp. 122-133
7. “To a Phenomenological Approach of the Problem of Organ Transplant after Brain Death”, 『臨床哲学』 Vol. 12, 2011.3, pp. 20-30
8. “Towards Studies of Nordic Caring — A Different Phenomenological Approach”, 『臨床哲学』 Vol. 14-2, 2013.3, pp. 2-20
10. “Intersubjectivity of Ageing — Reading Beauvoir’s The Coming of Age —”, 『臨床哲学』 Vol. 17, 2016.3, pp. 24-36
11. “Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective”, 『定常型社会におけるケアとそのシステム』科学研究費（基盤研究C）研究成果報告書（代表：紀平知樹），2016.3, pp. 71-82
12. “Dialogue in Husserl’s phenomenology and psychiatry”, 『定常型社会におけるケアとそのシステム』科学研究費（基盤研究C）研究成果報告書（代表：紀平知樹），2016.3, pp. 61-70
13. “To Live Together With Others — from Husserl’s Phenomenology of Intersubjectivity —”, 『臨床哲学』 Vol. 18, 2016.12, pp. 191-205

【単著論文：ドイツ語】

1. “Die transzendente Idealität von Raum und Zeit bei Kant”, 『デアロゴス』（九州

- 大学哲学倫理学会) 第4号, 1991.6, pp. 65-82
2. “Zur Phänomenologie des Unsichtbaren: Husserl und Heidegger”, 『人文論集』(静岡大学人文学部) 第52号の1, 2001.7, pp. 1-15
 3. “Zur Phänomenologie des Dialogs: Husserl und Heidegger”, 『人文論集』(静岡大学人文学部) 第52号の2, 2002.1, pp. 1-16
 5. “Schütz und Husserl — Zur Phänomenologie der Intersubjektivität —”, *FOCUS PRAGENSIS, Yearbook for the Philosophy and Phenomenology of Religion*, 2004, pp. 115-137
 6. “Schütz und Husserl — Zur Phänomenologie der Intersubjektivität —”, 『人文論集』(静岡大学人文学部) 第55号の2, 2005.1, pp. 1-24
 7. “Zu einer Phänomenologie des Dialogs: Husserl und Heidegger”, *Interdisziplinäre Phänomenologie*, Vol. 2, 2005.4, pp. 149-161
 9. “Fürsorge im Leben und Sterben — Aus phänomenologisch-anthropologischer Sicht —”, 『人文論集』(静岡大学人文学部) 第58号の1, 2007.7, pp. 1-18

【共著論文・日本語】

1. 「心理臨床家の教育における倫理的、法学的課題—大学院教育および生涯教育に関する検討—」『人文論集』(静岡大学人文学部) 第56号の1, 2005.7, pp. 1-22
2. 永浜明子・永山亜樹・浜渦辰二「広汎性発達障がいのある学生の大学生活における困りに関する当事者研究」『日本教育保健学会年報』第23号, 2016, pp. 15-24
3. 永浜明子・永山亜樹・浜渦辰二「広汎性発達障がいのある青年の日常生活における「困り」に関する当事者研究—具体的現象と対処・対応—」『日本教育保健学会年報』第24号, 2017, pp. 1-14
4. 永浜明子・永山亜樹・浜渦辰二「関係の変化に伴う「支援」から「共歩」への移行—自閉症スペクトラムの青年との歩みから—」『対人援助研究』第6号, 2017, pp. 24-47

Ⅲ. 翻訳

【単訳書】

1. クラウス・ヘルト『20世紀の扉を開いた哲学—フッサール現象学入門—』九州大学出版会, 2000.4, pp. 1-142+I-XL
2. エトムント・フッサール『デカルト的省察』岩波書店(岩波文庫), 2001.2, pp. 1-375+1-15

【監訳書・共訳書】

1. シドニー・シューマーカーク(菅豊彦との共訳)『自己知と自己同一性』勁草書房,

1989.9, pp. 1-306

2. エトムント・フッサール（山口一郎との共監訳）『間主観性の現象学 その方法』ちくま学芸文庫, 2012.5, pp. 1-552+i-vi
3. エトムント・フッサール（山口一郎との共監訳）『間主観性の現象II その展開』ちくま学芸文庫, 2013.9, pp. 1-599+i-vii
4. エトムント・フッサール（山口一郎との共監訳）『間主観性の現象学III その行方』ちくま学芸文庫, 2015.10, pp. 1-599+i-vii

【単訳論文】

1. ヘルムート・フェッター「初期ハイデガーにおける「世界」概念」『文化と哲学』（静岡大学哲学会）第15号, 1998.3, pp. 51-77
2. クラウス・ヘルト「現象学入門（上）—現象学的方法—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第50号の1, 1999.7, pp. 1-46
3. クラウス・ヘルト「現象学入門（下）—生活世界の現象学—」『人文論集』（静岡大学人文学部）第50号の2, 2000.1, pp. 53-101, 279-303
4. ディーター・ローマー「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析 予持は何を“予持”するのか？」PROCEEDINGS OF THE THIRD INTERNATIONAL MEETING FOR HUSSERL STUDIES IN JAPAN, 2003.11, pp. 129-144
5. ラズロ・テンゲイ「生活世界における経験」『臨床哲学』第11号, 2010.6, pp. 151-164

【共訳論文】

1. ディーター・ローマー（川崎唯史との共訳）「非言語的な思考とコミュニケーション—AACへの応用という側面とともに—」『臨床哲学』Vol. 13, 2012.3, pp. 62-90
2. カーリン・ダールベリ（川崎唯史との共訳）「患者に焦点を当てることは生活世界に焦点を当てることである—ケア学というパースペクティヴ—」『看護研究』医学書院, Vol. 45-05: 特集「北欧ケアとは何か 看護研究への示唆」, 2012.8, pp. 439-449
3. リサ・フォークマーソン・シェル（高山佳子との共訳）「位置づけられた身体をもつことと家（ホーム）がもつ意味—フェミニスト現象学の視点から—」『臨床哲学』Vol. 15-2, 2014.3, pp. 74-100
4. ディーター・ローマー（山口弘多郎との共訳）「数学における非言語的思考」『臨床哲学』Vol. 15-2, 2014.3, pp. 101-117
5. リサ・フォークマーソン・シェル（青木健太との共訳）「単なる喪失ではない：加齢に伴う認知症における自己のあり方」『臨床哲学』Vol. 16, 2015.3, pp. 82-109
6. サラ・ヘイナマー（高原耕平との共訳）「老いの変容：自己性、標準性、時間」『臨床哲

学』 Vol. 17, 2016.3, pp. 77-100

7. インガ・レーマー（高山佳子との共訳）「『最大限の価値に到達するマシン』から道理にかなう愛ある人間へーフッサールの倫理学における主観性ー」『臨床哲学』 Vol. 18, 2016.12, pp. 175-190

Ⅳ. 口頭発表

【学会・研究会口頭発表：日本語】

1. 「フッサール『第一哲学』における現象学的還元」第29回西日本哲学会, 1978.11.18, 鹿児島大学
2. 「フッサール『イデー第二巻』における「人格」論について」第33回西日本哲学会, 1983.12.26, 福岡教育大学
3. 「異他なるパースペクティヴを経験するーフッサール相互主観性の現象学における他者経験をめぐってー」第37回西日本哲学会, 1986.11.21, 西南学院大学
4. 「他者経験の構造と発生：フッサール相互主観性の現象学をめぐって」日本現象学会第9回研究会, 1987.5.25, 國學院大学
5. 「我と他者は痛みの心を共通にもっているかー谷口龍男氏への質問ー」第53回日本哲学会, 1994.5, 三重大学
6. 「見えないものの現象学のために」第83回現代哲学研究会シンポジウム「現象学の新しい可能性」, 1996.3.24, 京都大学京都会館
7. 「フッサール・データベースの新段階ーデータの追加とホームページの開設ー」第4回情報知識学会研究報告会, 1996.5.25, 凸版印刷本社
8. 「身体・他者・時間ーフッサールの反デカルト的省察ー」中部哲学会1996年大会シンポジウム「デカルトの現在ー自然学と形而上学をめぐってー」, 1996.10.5, 愛知大学三好キャンパス
9. 「大学の教育と研究の現場でぶつかる情報倫理の問題」日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「情報倫理の構築」プロジェクトー広島, 1999.8.17, 広島大学
10. 「報告：末期がん患者の精神医療のあり方をめぐってーケアの人間学へむけてー」科研費共同研究「いのちとところに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築」研究会, 2001.9.1, 静岡大学
11. 「ロゴスとディアロゴス：フッサール現象学における論理と世界」中部哲学会シンポジウム「論理と世界」, 2001.10.7, 信州大学
12. 「自然と精神ー『イデーⅡ』から『自然と精神』へー」「フッサール研究会」創立記念・第1回研究会, 2002.3.16, 八王子大学セミナーハウス

13. 「フッサールにおける自然と精神—精神医学の現在—」臨床と哲学の研究会, 2002.12.20, 名古屋大学医学部精神医学教室
14. 「フッサールと自己組織性システム」「複雑系と現代存在論」第3回研究会, 2003.10.18, 静岡大学人文学部
15. 「フッサールにおける現象学と存在論」立命館大学哲学会シンポジウム「現象学以後の／による現象学—21世紀の扉を開くために—」, 2003.10.25, 立命館大学アカデメイア立命
16. 「ターミナル・ケアと安楽死のあいだで—その倫理的、法的側面—」第3回「臨床と法」研究会, 2005.1.27, 静岡大学人文学部
17. 「脳科学と現象学」「複雑系と現代存在論」第4回研究会, 2005.5.14, 榊原邸
18. 「統合学に現象学は貢献できるか」統合学術国際研究所2005年度第5回研究会, 2006.3.11, 妙見閣寺
19. 「終末期医療と安楽死—ケアの人間学からのアプローチ—」唯物論研究協会第29回研究大会, 2006.10.22, 静岡大学教育学部
20. 「語りとパースペクティブ」第6回河合臨床哲学シンポジウム, 2006.12.9, 東京国立博物館・平成館大講堂
21. 「生・死とケアの哲学」日本哲学会第66回大会：共同討議Ⅱ, 2007.5.19, 千葉大学
22. 「緩和ケアと尊厳—ケアの現象学的人間学からのアプローチ—」第2回中部生命倫理研究会, 2007.7.14, 名古屋大学文学部
23. 「フッサール現象学から見た「人間と環境」」第2回学際現象学研究会, 2007.12.8, 京都大学大学院人間・環境学研究科
24. 「ビジネス・倫理・ケア」西日本哲学会シンポジウム「応用倫理学の現在」, 2008.12.7, 琉球大学
25. 「ケアの現象学への途上で」「ケアの臨床哲学」研究会, 2009.8.22, 大阪大学
26. 「日本における高齢者ケアを考える」南山大学地域研究センター共同研究「介護およびケア概念の日独比較」, 2009.9.19, 南山大学社会倫理研究所
27. 「ケアの現象学のために—ナラティブとパースペクティブ—」日本現象学・社会科学会第26回大会, 2009.12.5, 神田外語大学
28. 「ケアの現象学のために—北欧ケア研究への序—」科研「現象学的看護研究の方法論の確立のために」研究会, 2010.1.10, 大阪大学OSIPP千里エクステンション
29. 「ビジネスとケアをつなぐ倫理」国際シンポジウム「ビジネス・エシックスを多角的に考える」, 2010.2.12, 神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
30. 「人間の成熟をめぐる—成熟の間主観性という次元—」名古屋哲学研究会, 2010.6.27,

名古屋市立大学

31. 「終末期を考えるー尊厳死ー」第40回「ケアの人間学」合同研究会, 2011.1.22, 静岡市産学交流センター
32. 「ケア学ヨーロッパアカデミーとボラス大学」科研「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」第3回研究会, 2011.1.23, 神戸学院大学ポートアイランドキャンパス
33. 「ケアとシステム」日本倫理学会, 2011.9.30, 富山大学
34. 「直観とそれを隠れて支えているものー「直観と倫理」へのフッサール現象学からのアプローチー」関西倫理学会シンポジウム「直観と倫理」, 2011.10.30, 関西大学
35. 「応用現象学とケア論ー北欧現象学との交流のなかからー」静岡大学哲学会, 2011.11.3, 静岡大学
36. 「北欧ケアの人間学」第44回「ケアの人間学」合同研究会, 2012.6.16, 静岡看護専門学校
37. 「ケアの現象学にむけてー現象学の可能性をめぐって(2)ー」九州大学哲学会平成24年度大会, 2012.9.29, 九州大学
38. 「ケアを支えるシステム」科研「定常型社会におけるケアとそのシステム」, 2012.10.6, 兵庫医療大学
39. 「ケアの現象学と人称性」科研プロジェクト「ケアの現象学の具体的展開と組織化」第4回「ケアの現象学」研究会, 2013.06.29, 大阪大学
40. 「北欧における看取りをめぐる状況ーとその周辺の欧州視察報告2ー」「欧州看取り科研」第6回研究会, 2014.03.21, 上智大学
41. 「尊厳死を法制化するとは?ーヨーロッパではー」科研研究会「定常型社会におけるケアとそのシステム」, 2014.6.8, 兵庫医療大学
42. 「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実ー自律と依存を両立させる試みー」静岡大学哲学会第37回大会シンポジウム「欧州における看取りと自己決定」, 2014.11.03, 静岡大学
43. 「生老病死と共に生きるーケアの臨床哲学にむけてー」日本哲学会第74回大会シンポジウム「ケアー共に生きるー」, 2015.05.16, 上智大学
44. 「フッサール現象学と精神医学における対話」阪大・臨床哲学研究室&東大・UTCP上廣共生哲学寄付研究部門合同ワークショップ「障害の哲学:理論とその応用」, 2015.10.22, 大阪大学
45. 「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす」明治大学人文科学研究所総合研究「現象学の異

境的展開」主催「ケア・ジェンダー・いのち：北欧における現象学の展開」, 2017.1.8, 明治大学

46. 「死に行く患者のための家族によるケア—尊厳死を法制化すべきなのか?—」NCCU-OU Workshop on Clinical Philosophy, 2017.9.15, 台北・政治大学(台湾)

【学会・研究会口頭発表：英語・ドイツ語】

1. "Ein japanisches Projekt: Husserl in Database", Die Tagung "Übersetzung von Husserl und Heidegger ins Russische", 1995.9.28, in der Katholischen Akademie der Erzdiözese Freiburg, Freiburg (Germany)
2. "Relativism and Communication — from a Husserlian point of view — ", The 5th Japanese/American Phenomenology Conference, "The Possibility of Cross-Cultural Communication", 1996.9.21, Tohoku University, Sendai (Japan)
3. "Zur Phänomenologie des Unsichtbaren: Husserl und Heidegger", The International Conference on Translation Conceptions of the German Classical Philosophy of the XXth Century: Husserl and Heidegger, 1998.6.8, Russian State University for the Humanities in Moscow (Russia)
4. "Zur Phänomenologie des Dialogs: Husserl und Heidegger", Phänomenologisches Kolloquium von alten Wuppertalern: KLAUS HELD UND NEUES LICHT IN DER SOZIALPHÄNOMENOLOGIE — Zur Laudatio Klaus Held anlässlich seines 65. Geburtstag, 2001.5.5, Kyoto University, Kyoto (Japan)
5. "Nature and Spirit — from Ideas II to Nature and Spirit — ", Issues Confronting the Post-European World / A conference dedicated to Jan Patocka (1907-1977) on the occasion of the founding of the Organization of Phenomenological Organizations (OPO), 2002.11.8, Prague (Czech)
6. "The Aim of Our Project and a Sample Case of New Materials 'Nature and Spirit'", THE FIRST INTERNATIONAL MEETING FOR HUSSERL STUDIES IN JAPAN, 2002.11.23, Shizuoka University, Shizuoka (Japan)
7. "Schütz und Edmund Husserl — Zur Phänomenologie der Intersubjektivität —", International Conference "ALFRED SCHUTZ AND HIS INTELLECTUAL PARTNERS", 2004.4.3, Waseda University International Conference Center, Tokyo (Japan)
8. "Identity and alterity: Schutz and Husserl on phenomenology of intersubjectivity", The 1st International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle),

2004. 5.24, The Chinese University of Hong Kong (China)
9. "Phänomenologie und das sich organisierende System", das vorbereitende Symposium für Begründung der Gesellschaft von der Integrativen Wissenschaft, 2004.10.14, Hotel "König" in Bonn (Germany)
 10. "Caring for life and death — From a phenomenological anthropology of caring — ", The Korean Society of Phenomenology, 2007.3.24, Sungkyunkwan University, Seoul (South Korea)
 11. "Phenomenology and Analytical Philosophy in Japan — A Historical Study — ", 2007.3.27, Seoul University, Seoul (South Korea)
 12. "To the phenomenological anthropology of caring — On decision at the terminal care in Japan — ", The 2nd Conference of Applied Phenomenology, 2007.9.21, Ritsumeikan University, Kyoto (Japan)
 13. "Narrative and Perspective", The 7th Symposium Husserl 150, 2009.4.25, Tampere University, Tampere (Finland)
 14. "Narrative and Perspective", The 3rd International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), 2009.9.21, Seoul National University, Seoul (South Korea)
 15. "Watsuji's 'Ethik' als Anthropologie. Zur Rezeption deutscher Philosophie in Japan", 2012.7.17, Philosophisches Institut von Heidelberg Universität, Heidelberg (Germany)
 16. "Watsuji's Übersetzung der deutschen philosophischen Vokabeln", 2012.7.19, Japanisches Institut von Heidelberg Universität, Heidelberg (Germany)
 17. "To a Phenomenological Investigation on the Problem of Organtransplantation after Brain Death", The Fourth International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), 2010.12.9-13, National Sun Yat-Sen University, Kaohsiung (Taiwan)
 18. "Caring und Phänomenologie — Aus der Sicht von Husserls Phänomenologie der Intersubjektivität — ", Internationale Tagung des Husserl-Archivs Köln im Zusammenarbeit mit der Deutschen Gesellschaft für phänomenologische Forschung, 2013.09.28, Universität zu Köln, Köln (Germany)
 19. "Caring and Phenomenology — From Husserl's Phenomenology of Intersubjectivity — ", Kairos and Topos: Phenomenology and the Celebration of Thinking, The 6th International Conference of P.E.A.C.E (Phenomenology for East-Asian Circle) cum 8th SPA (Symposia Phenomenologica Asistica), 2014.5.20, The Chinese University of Hong

Kong, Hong Kong (China)

20. "From my experience of having lost two mothers — On dying after living with dementia from a second-person perspective of Japanese philosophical researcher — ", Centre for Gender Research of Uppsala University, 2014.10.10, Uppsala (Sweden)
21. "A Comparative Inquiry into 'Advance Decisions' in Japan, Germany and the UK", Medical Humanities Seminar Series Spring 2015, The Body: Health, Wellbeing and Vulnerability, 2015.02.18, University of Hull, Kingston upon Hull (UK)
22. "Dementia as a sickness of interpersonal relationship", International conference in Norrköping "Life with Dementia: Relations", 2014.10.15, Centre for Dementia Research, Linköping University, Norrköping (Sweden)
23. "Dialogue in Husserl's phenomenology and psychiatry", An interdisciplinary workshop "DIALOGUE AND INTERSUBJECTIVITY", 2015.09.16, Helsinki University (Finland)
24. "Intersubjectivity of Ageing — Reading Beauvoir's The Coming of Age — ", Seminar for philosophy of Helsinki University, 2015.09.18, Helsinki University (Finland)
25. "Introduction to Phenomenology of Vulnerability and Limits — Finnish-Japanese Research Collaboration — ", International Symposium "Phenomenology of Vulnerability and Limits", 2016.03.01-03, Osaka University (Japan)
26. "On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology", The 7th International Conference of P.E.A.CE (Phenomenology for East-Asian Circle) "Phenomenology of Dis/Ability", 2016.12.16, Tokyo University, Komaba (Japan)
27. "On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology", Nordic Society for Phenomenology, Annual Conference, Phenomenology and the Body — Contemporary Perspectives, 2017.6.17, Norwegian University of Science and Technology (NTNU) , Trondheim (Norway)
28. "Phenomenology of clinical caring", Project "Phenomenology : a multidisciplinary dialogue", 2017.10.25, Hong Kong Shue Yan University (China)
29. "Zwei Wege der klinischen Philosophie in Japan", Klinik für Allgemeine Psychiatrie, Sektion "Phänomenologische Psychopathologie und Psychotherapie", Karl-Jaspers-Professur für Philosophie und Psychiatrie, 2017.12.5, Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg (Germany)
30. "Die Begriffe ‚Verhältnis‘, ‚Amae‘ und ‚Aida‘ im Vergleich", Institut für Japanologie, 2017.12.7, Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg (Germany)

【講演・シンポジウム・公開講座】

1. 「他者と異文化について哲学してみよう」1993年度人文学部公開講座, 1993.11.19, 静岡市中央公民館アイセル21
2. 「対話の現象学への一つのアプローチ「父性の不在」(森下香枝ルポ)を手がかりに一」臨床と哲学の研究会 6 月例会, 2000.6.28, 静岡大学人文学部
3. 「「父性の不在」論・統一対話の現象学への一ステップ」臨床と哲学の研究会 3 月例会, 2001.3.21, 静岡大学教育学部
4. 「21世紀、知は人間に収斂してくる」静岡県中小企業家同友会大学, 2001.4.28, J R 東海静岡社員センター
5. 「精神病理学は「失敗した学問」なのか?—渡辺哲夫『二十世紀精神病理学史序説』を読む—」臨床と哲学の研究会, 2002.4.17, 静岡大学人文学部
6. 「末期がん患者の精神医療をめぐって—ケアの人間学へむけて—」第 1 回「ケアの人間学」合同研究会, 2002.5.25, 静岡市立静岡看護専門学校
7. 「現代思想入門」静岡県高等学校社会科教育研究協議会公民部会, 2003.1.17, 磐田市福祉センター
8. 「内海健『分裂病』の消滅—精神病理学を越えて—」(青土社、2003年)を読む」臨床と哲学の会, 2004.2.18, 名古屋大学医学部精神医学教室
9. 「ケアの人間学が目指すもの—三つの講演会を終えて—」第11回「ケアの人間学」合同研究会, 2004.7.31, 静岡市立静岡看護専門学校
10. 「現象学と精神病理学」名古屋大学医学部精神科精神病理学グループ合宿, 2004.8.29, 長野県野野麦峠スキー場ヒュッテ
11. 「研究活動報告:「ケアの人間学」と「生命ケアの比較文化論」」静岡大学哲学会, 2004.11.3, 静岡大学人文学部
12. 「フッサール哲学からみた間主観性の発達」日本乳幼児医学・心理学会, 2004.11.6, あいち小児保健医療総合センター
13. 「「臨床と法」研究会の趣旨・前史・計画」第 1 回「臨床と法」研究会, 2004.11.18, 静岡大学人文学部
14. 「脳科学と現象学」名古屋大学医学部精神科精神病理学グループ 6 月ミーティング, 2005.6.24, 名古屋大学精神科医局
15. 「報告:看板を「哲学」から「人間学」に替えた一つの試み」中部哲学会シンポジウム「哲学教育をめぐって」, 2005.10.2, 静岡大学
16. 「仏独・ホスピスとスピリチュアル・ケア研修報告」「臨床と法」研究会10月例会,

2005.10.20, 静岡大学法科大学院模擬法廷教室

17. 「ケアの人間学：仏独・ホスピスとスピリチュアル・ケア研修報告」第117回スピリチュアルケア研究会, 2005.10.31, 済生会総合病院
18. 「ケアの人間学—スピリチュアル・ケアを中心に—」平成17年度 静岡大学公開講座「いのちのケア」, 2005.11.11, 静岡市産学交流センター
19. 「ケアの人間学—高齢者ケアのために—」ケアサポートみずき主催「一般講座」, 2005.12.7, 富士宮市総合福祉会館
20. 「ケアの人間学—スピリチュアルケアのために—」地域ケアマネ支援ネット研修会, 2006.1.25, 総合介護サービスセンターしずおかエン・フレンテ
21. 「ケアの人間学—看護の専門職業人にむけて—」平成17年度卒業生に対する特別講義, 2006.3.2, 東海アクシス看護専門学校
22. 「地域で育てる対人援助（心理臨床・ヒューマンケア）」静岡大学人文社会系学部は、地域と連携します, 2006.4.20, 静岡市産学交流センター
23. 「人間にとってのケアとは—看護の専門職業人にむけて—」看護の日・特別講演, 2006.5.10, 富士市立看護専門学校
24. 「高齢者の看取りケア—ケアの人間学より—」静岡県老人福祉施設協議会特養部会職員研修会, 2006.8.30, 静岡商工会議所会館
25. 「「いのちのケア」をするあなたへ……」静岡県立子ども病院講演会, 2006.9.19, 静岡県立子ども病院
26. 「ケアのゆくえ：倫理と法を越えて」静岡大学公開講座「対人援助の倫理と法」, 2006.11.29, 静岡市産学交流センター
27. 「ケアのゆくえ：倫理と法を越えて」富士宮市社会福祉協議会, 2006.12.12, 富士宮市役所
28. 「北欧の高齢者ケア視察研修報告」平成19年度第6回「臨床と法」研究会, 2007.11.22, 静岡大学法科大学院法廷教室
29. 「医療従事者としての倫理」平成19年度看護共通Ⅱ・Ⅲ, 2007.12.4, 日本看護協会神戸研修センター
30. 「緩和ケアと尊厳」第110回ホスピスケア研究会, 2008.1.13, 東京ファッションタウンビル
31. 「終末期と高齢者のケア—ケアの現象学的人間学から臨床哲学へ—」第3回医療人文学研究会, 2008.4.23, 大阪大学待兼山会館
32. 「ケアの人間学—在宅ケアのゆくえ—」静岡県地域包括・在宅介護支援センター協議会,

2008.4.26, 静岡市産学交流センター

33. 「ケアしケアされる存在としての人間」東葛・生と死を考える会・月例学習会, 2008.7.19, 麗澤大学
34. 「緩和ケアと尊厳」がんコンソーシアム in 徳島, 2008.10.4, 徳島県立中央病院
35. 「ケアすること—ケアされること—」天竜厚生会看護職員向け研修会, 2008.12.9, 天竜厚生会研修センター
36. 「リビング・ウィルを考え直す」患者のウェルリビングを考える会, 2009.1.17, 神戸市・あすてっぶK O B E
37. 「ケアするということ」卒業記念講演, 2009.3.4, 静岡県中部看護専門学校
38. 「北欧研修旅行報告（第2弾）」科研費プロジェクト「ケアの現象学」第1回ミーティング, 2009.6.14, 東京大学哲学研究室
39. 「「ケア」の根底にある哲学」第46回〈ケア〉を考える会, 2009.6.21, 京都市中京区G L マンション
40. 「ケアの人間学（1）・（2）」京都労働学校「人間学講座」／第5・6回, 2009.11.5+12, 京都市・ラボール学園
41. 「ケアの現象学のために—英国ホスピスケアから北欧ケアへ—」介護福祉研究会, 2010.3.31, 聖隷クリストファ大学
42. 「ケアのゆくえ：倫理と法を越えて」浜松医科大学看護学科「看護倫理」, 2010.5.10, 浜松医科大学
43. 「脳死移植が変わる」大阪大学医学部現代教育科目「現代の生命倫理・法・経済を考える」, 2010.6.15, 大阪大学医学部
44. 「リビングウィルについて」市立砺波総合病院緩和ケア勉強会「終末期を考える—最期に私たちは何を選択できるのか—」, 2010.7.24, 市立砺波総合病院
45. 「尊厳死について」メディカル・カフェ, 2010.9.26, カフェP／S
46. 「生老病死について」連続講座「老いのこと、ちょっと考えてみませんか」第1回, 2010.10.23, 尼崎市東園田町会会館
47. 「ケアの人間学（1）・（2）」京都労働学校「人間学講座」, 2010.11.5+12, 京都市・ラボール学園
48. 「中欧から現代を考える」「グローバリズムと哲学的思考」第9回, 2010.12.8, 大阪大学豊中キャンパス
49. 「死と向き合うこと」東神戸病院緩和ケア病棟主催「ホスピスボランティア講座」, 2011.9.24, 六甲道勤労市民センター

50. 「ヒューマン・ケアと人間観—いのちの暮らしと人生を支える—」人間福祉学会, 2011.11.19, 岐阜都ホテル
51. 「死生観が必要である」第2回高齢者ケア・フォーラム, 2012.2.19, キャンパスプラザ京都
52. 「北欧ケアに哲学はある?」「ケアの臨床哲学」研究会主催シンポジウム「高齢社会のなかで北欧ケアを考える」, 2012.5.5, 大阪大学中之島センター
53. 「現代日本における死をめぐる状況」ハイデルベルク大学翻訳・通訳研究所, 2012.7.18, ハイデルベルク大学翻訳・通訳研究所
54. 「現代日本社会における“生老病死”」ライン・ネッカー友の会, 2012.7.26, ハイデルベルク大学日本学研究所
55. 「現象学と生きること」熊本現象学を学ぶ会, 2012.9.30, 菊南温泉ユウベルホテル
56. 「哲学者と考える高齢者ケア」神戸学院大学社会人キャリアアップ講座高齢者ケアキャリアアップコース講義, 2012.10.8, 神戸学院大学
57. 「事前指示書をめぐるドイツの現状」シンポジウム「高齢社会のなかでリビングウィルと事前指示書を考える」, 2012.10.27, 大阪大学中之島センター
58. 「現代日本における死をめぐる状況」玉川大学学術研究所人文科学研究センター平成24年度第2回公開講演会, 2012.11.10, 玉川大学
59. 「医療と福祉をつなぐケア学」鳥取県福祉研究学会第6回研究発表会記念講演, 2013.02.23, 鳥取県立福祉人材研修センター
60. 「「二・五人称の医療」とは」第268回川崎医学会講演会, 2013.08.05, 川崎医科大学附属病院
61. 「生きるということ—禅と臨床哲学の立場から自らの生老病死を考える—」DeJaK-友の会, 2013.11.16, ドイツ・デュッセルドルフ日本クラブ
62. 「“リビングウィル”について、法制化されたドイツの事情を聞きます」, フォアベルク, 2014.02.01, フォアベルク神戸ショールーム
63. 「身近な人を葬送するために何が必要ですか?」中之島哲学コレージュ, 2014.5.28, アートエリアB1
64. 「「事前指示」「リビングウィル」とは?—人生の最終段階を考える—」〈ケア〉を考える会-岡山, 2014.6.14, 川崎医療福祉大学
65. 「ホスピスの臨床哲学 日本とヨーロッパの見聞録」第6回ホスピス学校, 2014.7.5, 山梨県文学館
66. 「事前レクチャー「いつかくる死のことを考えておきたい」」第22回日本ホスピス・在宅

- ケア研究会全国大会 in 神戸, 2014.6.12, 神戸ポートピアホテル
67. 「二人の母を見送った体験から」 かいご・かんご塾胡桃, 2014.6.8, 大阪市空堀商店街
 68. 「保健医療の現場で当事者の価値に寄り添う倫理とは」 日本社会福祉会・日本医療社会福祉協会主催「保健医療分野におけるソーシャルワーク専門研修第10期スクーリング」, 2014.8.30, エルイン京都
 69. 「二人の母を見送った体験から」 高齢者ケア人材養成キャリアアップ講座, 2014.11.09, 神戸学院大学
 70. 「人間関係の病いとしての認知症—スウェーデンと日本の認知症ケアの比較—」 高齢者ケア人材養成キャリアアップ講座, 2014.11.09, 神戸学院大学
 71. 「医の倫理:言葉の不思議さ、重要性について」第47回東洋鍼灸医学大講演会「はり・きゅうのことで知って心身を養生」, 2014.11.16, 芝蘭会館稲森ホール
 72. 「意思決定支援のあり方」第2回 高齢者障がい者なんでも相談会総括フォーラム, 2015.03.07, 岡山きらめきプラザ
 73. 「尊厳死って何ですか?」2015年度第1回リビングウィル勉強会, 2015.04.05, 神戸市勤労会館
 74. 「さまざまなケア場面での「在宅・地域ケア」への動きから考える」第41回日本保健医療社会学会 大会テーマ「生活モデルへ転換」, 2015.05.17, 首都大学東京
 75. 「生老病死について」2015年度第2回リビングウィル勉強会「腎不全になったら」, 2015.06.20, 兵庫県立生活創造センター
 76. 「リビングウィル（どう生きるか?）について」講演会・シンポジウム「あなたは最期をどのように暮らしたいですか?—在宅ホームホスピスとは—」, 2015.07.04, 旭区民センター
 77. 「エンディングノートとリビングウィル」これからの葬送を考える会九州例会, 2015.08.01, 大分市妙瑞寺
 78. 「いつかやって来る死のことを考えておきたい」老い支度教室「エンディングノートを書こう」, 2015.10.03, 神戸生活創造センター
 79. 「依存と自立の対立を越えて」「マイケアプラン研究会」第179回1月定例会, 2016.01.15, ひと・まち交流館京都
 80. 「リビングウィルを法制化する必要があるのか?」2015年度第4回リビングウィル勉強会, 2016.02.06, あすてっぶKOBE
 81. 「北欧ケアの思想的基盤を求めて」公開ラウンドテーブル「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす」, 2016.02.20, 中之島センター

82. 「障がいをもちながら老いることと、老いるとともに障害をもつことの間」2015年度第5回リビングウィル勉強会「障がいをもつこと、老いること―障害者の自立支援と「65歳」問題（介護保険優先の規定）―」, 2016.04.17, あすてっぷKOBE
84. 「植物状態になったら―脳死とどうちがうの?―」2016年度第3回リビングウィル作成会「植物状態になったら」, 2016.06.4, あすてっぷKOBE
84. 「セデーションについて知る、考える」2016年度第4回リビングウィル作成会「がんになったら」, 2016.09.3, 東灘区民センター
85. 「こころの苦しみ～終末期鎮静を考える～」姫路聖マリア病院緩和ケア病棟20周年企画「こころの時代の緩和ケア」, 2016.10.29, 姫路聖マリア病院
86. 「看護ケアにおける臨床哲学的アプローチ」甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科解説10周年記念講演, 2016.11.26, 甲南女子大学
87. 「老いと若さの対立を越えて」第48回大阪大学公開講座, 2016.12.09, 大阪大学中之島センター
88. 「ケアの臨床哲学～生老病死の現場から～」椋山女学園創立111周年記念椋山フォーラム「ヒト・ひと・人」, 2016.12.10, 椋山女学園大学
89. 「ACPを知る～ACPの功罪～」2016年度第5回リビングウィル作成会「エンディングノートとリビングウィルノート」, 2017.1.21, あすてっぷKOBE
90. 「海外との比較でケアを考える」シンポジウム「超高齢社会のなかでこれからのケアを考える」, 2017.2.26, 大阪大学中之島センター
91. 「ドイツの介護保険、後見人制度、事前指示書」講演会「超高齢社会のなかドイツに学ぶ」, 2017.3.4, 大阪大学中之島センター
92. 「フッサール現象学における「能力と障がい」の問題について」, 2017.3.8, 中国・广州中山大学
93. 「現代日本における終末期医療の問題」, 2017.3.13, 中国・香港中文大学
94. "Feminist Phenomenology: Perspectives from Japan", The Seminar in Feminist Continental Philosophy in Stockholm, 2017.6.12, Stockholm University, Stockholm (Sweden)
95. 「看護の原点を見つめて―臨床哲学の視点から―」第18回日本赤十字看護学会学術集会特別講演, 2017.6.24, 北九州国際会議場
96. 「高齢者ケアにおける自己決定を考える」〈ケア〉を考える会（第113回）, 2017.7.9, 京都市山科区の民家
97. 「事前指示と事前ケア計画の比較」シンポジウム「超高齢社会のなかでACP（アドバン

- ス・ケア・プランニング)を考える, 2017.7.23, 大阪大学中之島センター
98. 中山大学心理健康教育センター主催連続講座, 「現代日本における精神医療」2017.9.1 ; 「現代日本における医療倫理」2017.9.21, 広州中山大学附属第三病院 (中華人民共和国)
99. かなしみポスト主催3回連続講座「かなしみとともに生きる社会へ」1) 2017.10.7, 「老いとともに生きる」; 2) 2017.10.14, 「病いとともに生きる」; 3) 2017.10.21, 「死を見つめて生きる」, 大阪大学中之島センター
100. 「日本における終末期ケアの現状」, 2017.11.28, 東アジア研究センター・日本学研究所・翻訳通訳学科共催講演 (ドイツ)
101. 「意思決定支援について」, 2017.12.16, 豊中市労働会館

V. その他

【書評】

1. 新田義弘著『哲学の歴史』(講談社, 1989年) 1990.2.26, 『週刊読書人』
2. エトムント・フッサール (山口一郎・田村京子訳) 『受動的総合の分析』(国文社, 1997年) 1998.10.31, 『現象学年報』(日本現象学会) 第14号, pp. 245-252
3. マイケル・ダメット (野本和幸ほか訳) 『分析哲学の起源』(勁草書房, 1998年) 1999.4.2, 『週刊読書人』
4. 新田義弘 (編) 『フッサールを学ぶ人のために』(世界思想社, 2000年) 2000.11.17, 『週刊読書人』
5. マルク・リシール『身体一内面性についての試論』(ナカニシヤ出版, 2001年) 2002.3.1, 『日経サイエンス』2002年3月号, p.123
6. 貫成人『経験の構造—フッサール現象学の新しい全体像』(勁草書房, 2003年) 2003.10.17, 『週刊読書人』
7. 佐藤泰子『苦しみと緩和の臨床人間学—聴くこと、語ることの本当の意味—』(晃洋書房, 2011年) 2012.3.20, 京都大学大学院人間・環境学研究科編『人環フォーラムNo. 30』, p.49

【辞典等項目執筆】

1. 木田 元ほか編『現象学事典』(弘文堂), 1994.3
2. 村田純一編『新・哲学講義 (4)』(岩波書店), 1998.2
3. 廣松渉ほか編『哲学・思想事典』(岩波書店), 1998.3
4. 『アエラムック現代哲学がわかる。』(朝日新聞社), 2002.2, pp. 20-23
5. 大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編／見田宗介編集顧問『現代社会学事典』(弘文堂), 2012.12

【小文など】

1. 「他者との共生—『フッサール間主観性の現象学』の刊行に寄せて—」『創文』No. 365, 1995.6.1, pp. 10-13
2. 「国内情報：インターネットによるフッサール・データベースの公開」『現象学年報』第11号, 1996.1.31, pp. 85-91
3. 「フッサール・データベースの現状報告」『情報知識学会ニューズレター』36, 1996.2.1, pp. 5-11
4. 「インターネットによって利用可能な哲学関係の情報源について」『情報知識学会ニューズレター』39, 1996.8.1, pp. 8-13
5. 「現象学とウィーン—フェッター教授の講演に先だって—」静岡大学哲学会『文化と哲学』第15号, 1998.3.20, pp. 39-50
6. 「国内事情：インターネットは日本現象学会に世界の開けを与える」『現象学年報』第14号, 1998.10.31, pp. 253-260
7. 「教育におけるコンピュータの利用—人間学の場合—」『静岡大学情報処理センター広報』(No. 9), 1999.3.1, pp. 15-25
8. 「「環境ホルモンで人間がキレル」説」『日経E C O21』, インタビュー, 2000.3.1
9. 「国内事情：フッサール・ルネサンス—フッサール研究会設立さる—」『現象学年報』（日本現象学会）第18号, 2002.11.30, pp. 217-221
10. 「コメント：一生の仕事として職業をもつことを考えていますか？」男女共同参画啓発冊子『ねっとわあく』, 静岡県男女共同参画センター交流会議, 2004.10.1
11. 「コラム：子育て（上・下）」『静岡新聞』, 2005.5.30+6.7
12. 「「地域で育てる対人援助（心理臨床・ヒューマンケア）」『みんなの大学』Vol. 7「特集＜産学連携イベント＞」, 2006.4.20
13. 「ケアという共同行為にともに参加する—ケアする人のケア—」静岡県ボランティア協会編『ボランティア情報静岡』：特集『混迷する今 ケアする人のケアを』, 2007.8
14. 「医療者が死に向き合うことについて（座長まとめ）」日本臨床死生学会 Vol. 16, No. 1（共著・文責）2012.3
15. 「いつかやって来る死のことを考えておきたい」患者のウェル・リビングを考える会編『大切なあなたに「伝えておきたいこと」ファミリー・リビングウィル』, 2012.3
16. 「高齢者のための臨床哲学」コラム「ドイツで迎える老後のお話」『Doitsu News Digest ニュースダイジェスト, 1』「生きるということ」（2013.11.01）；2）自律と連帯が共存する社会（2013.12.06）；3）終活は生き方と逝き方を語り合うこと（2014.01.03）

17. 「「好きにさせて」とは、どういうことか？」 My Car Plan News第164号, 2016.2, pp. 1-2
18. 「「ホーム」の意味について考える」竹之内裕文・浅原聡子編『喪失とともに生きる』: 5章「ホームを失って生きる一路上生活者の語りから」へのコメント, 2016.4, pp. 193-198

VI. 科学研究費補助金等外部資金（代表のみ、分担は略）

1. 科学研究費研究成果公開促進費, 1995年度, 単著『フッサル間主観性の現象学』刊行
2. 科学研究費研究成果公開促進費（データベース）, 1994年4月～1997年3月, 「フッサル・データベース」の公開
3. 科学研究費・基盤研究（C-2）, 2000～2001年度, 研究課題「いのちとところに関わる現代の諸問題の現場に臨む臨床人間学の方法論的構築」（代表：松田純から2年目引き継ぐ）
4. 科学研究費・基盤研究（B-1）, 2002年度～2004年度, 研究課題「新資料・新研究に基づく、フッサル現象学国際的研究の新しい地平の開拓」
5. 科学研究費・基盤研究（B）, 2005年度～2007年度, 研究課題「対人援助（心理臨床・ヒューマンケア）の倫理と法、その理論と教育プログラム開発」
6. 科学研究費・基盤研究（B）（海外学術調査）, 2010年度～2012年度, 研究課題「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」
7. 科学研究費・基盤研究（B）（海外学術調査）, 2013年度～2015年度, 北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明
8. 課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業「実社会対応プログラム」, 2013年度後期～2015年度前期, 「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」
9. 大阪大学「国際シンポジウム開催支援事業」, 国際シンポジウム Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium “Phenomenology of Vulnerability and Limits”, 2016.3.1-3
10. 科学研究費・基盤研究(B)（一般）, 2016年度～2019年度, 「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」
11. 科学研究費研究成果公開促進費, 2017年度, 編著『北欧ケアの思想的基盤を掘り下げる』刊行

VI. 賞罰

2011～2016年度 6年連続で大阪大学文学研究科「優れた教員」として表彰された。